《研究ノート》

1930 年代初頭ソ連極東における食料問題と「特別国防フォンド」の創設

寺山　恭輔*

The Food Crises in the Soviet Far East in the beginning of 1930s and the Founding of the Special Defense Food Reserve.

TERAYAMA Kyosuke

要旨

1931 年 9 月 18 日の満洲事変勃発後、ソ連極東地方では国防力の増強が図られた。兵士はもとより様々な国防建設事業に従事する労働者の生活を支えるための食料供給は非常に重要な問題だったが、ソ連極東が自身の力で必要な供給を行うことができなかったため、ソ連の他の地域からの輸送や時には外国からの食料輸入が必要だった。本稿はこの食料問題に注目し、極東地方と中央がいかに対処したのかについてまとめることを課題とする。当時の極東地方の食料事情、外部からの食料輸送の実態を明らかにし、1933 年 8 月に、スターリン指導部が極東及び東シベリア地方に「特別国防フォンド」の創設を決定するまでの過程を明らかにする。この分野の先行研究は乏しく、本研究はスターリン統治下の地方政策について全く新しい視点からの考察を提供している。

キーワード　：　スターリン、ソ連極東、満洲事変、国防、食料、備蓄
Keywords　：　Stalin、Soviet Far East、Manchurian Incident、Defense Policies、Food、Reserves

目次

1. はじめに
2. 極東における食料事情と食料産業の整備
　2.1. 極東の食料事情――どこから食料を運び込むか？
　2.2. 外国からの穀物輸入

*東北大学東北アジア研究センター
『東北アジア研究』28 号（2024 年）、43-90 頁、https://doi.org/10.50974/0002000663
© 2024 KAWAGUCHI Hiroyuki　Shuanyue BAO
本著作物は、特に記載がない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際（CC BY 4.0）ライセンスの下で提供されています。https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

2.3. ソ連極東で食料供給を受ける人数
2.4. 極東及び東シベリアにおける食料産業の整備
3. 極東地方と各種食料――塩、野菜・ジャガイモ、
3.1. 満洲事変前のソ連極東と塩
3.2. 満洲事変後のソ連極東と塩、全国的な塩不足と備蓄解除
3.3. その後のソ連極東と塩
3.4. ソ連極東への野菜、ジャガイモ供給
4. 備蓄委員会の活動、極東との関係
5. 特別国防フォンドの創設
5.1. 特別国防フォンド創設までの過程
5.2. 特別国防フォンド創設決定後の諸問題と初期の対応――1933年末まで
6. おわりに

1. はじめに

1931年9月18日に勃発した満洲事変後、スターリン（Сталин, Иосиф Виссарионович、1878-1953）を中心とする全連邦共産党中央委員会政治局［本稿では以下、政治局と略す。また党とはこの共産党のことを意味する］はソ連極東へ航空部隊（注1）、魚雷艇部隊（注2）、陸上部隊（注3）を派遣するとともに、1920年代に極東地方党委書記を務め、極東事情に詳しい陸海軍事人民委員代理で軍の政治局長ガマルニク（Гамарник, Ян Борисович、1894-1937）を派遣し、1932年から大々的な国防事業を極東地方で展開しはじめた（注4）。ロシア中央から極東地方へ軍事部隊、技術者、労働者や様々な物資を大量に輸送するためにも極めて重要な鉄道、動員政策の分野にも当局は大きな関心を払った［寺山1998b、寺山2000a、寺山2000b、寺山2005、寺山2022b］。鉄道による大規模な人の移動に伴う感染症にも対応し［2022c］、軍の運用に不可欠な気象情報［寺山2023b］や電話、電信等の通信分野［寺山2023c］の改善にもスターリン指導部は取り組んだ。満洲事変直後に政治局は備蓄委員会を設置し［寺山1998a］、穀物を含む様々な物資の国家的な備蓄を開始した。その国家備蓄とも深く関係するが、満洲事変から約2年後の1933年8月、政治局が特別国防フォンド［особый оборонный фонд］を極東地方及び東シベリア地方に設立するまでの食料政策の変遷をまとめることが本稿の課題である。ロシア語の「フォンド」には基金、資金、保有量、在庫、備蓄等の意味がある。本稿で引用される文書のフォンドは備蓄の意味が強いと思われるが、そのままこの言葉を使用する。本稿では、最初にソ連極東地方における食料供給事情を概観し、域外からの搬入の実態、外国からの輸入政策にも着目しつつ、個別の食品に関する供給の実例を示し、全国的に進められていた備蓄政策との関係についても考察し、最後に特別国防フォンド構想の内容について紹介する。本稿が提起する課題は、1933年のドイツにおけるヒトラーの権力獲得前後、極東における安全保障上の懸念がスターリン体制の深化にどのような影響

を与えたのか、ほぼ同時代にソ連を襲った大飢饉がソ連の極東政策と無関係だったのか、という問題とも深く絡んでくる。

2. 極東における食料事情と食料産業の整備

2.1. 極東の食料事情――どこから食料を運び込むか？

地域内で食料を完全自給できない極東地方には、外部から食料を運び込む必要があった。満洲事変勃発から約 1 か月後の 1931 年 10 月 20 日、極東地方における食料事情についてソ連供給人民委員代理チェルノーフ（Чернов, Михаил Александрович、1891-1938（注 5））がソ連人民委員会議［人民委員とは大臣、閣僚を意味するので閣僚会議、内閣のこと。ソ連を構成していた各共和国にも存在した］議長代理ルズタク（Рудзутак, Ян Эрнестович、1887-1938（注 6））に説明した。その概要は次の通りである。

> 極東地方では工業、漁業、北方開発等の作業で最低でも 1600 万プード〔1 プード 16.38 kg なので 26 万 2080 t、以下同じ〕が必要だが、1930-31 年には食料穀物（小麦、ライ麦）は 1230 万プード消費された。この他に 1932 年の第 1 四半期から新しい収穫物が入るまで 400 万プードの繰り越し備蓄 переходящий запас が必要で、新年の収穫まで合計で最低 2000 万プード必要だ。1931 年 7 月 1 日現在 140 万プードが存在し、輸送途上に 300 万プードあり、域内で調達される 620 万プードと合わせると 1060 万プードとなり、大雑把に見積もって 1000 万プード〔16 万 3800 t〕の搬入が必要だ。毎年極東地方には東西シベリアから食料を運んでいるが、東シベリアの工業の発達と西シベリアでの収穫減少のため両地方だけで極東地方の供給を賄えない。2310 万プードを必要とする東シベリアでの調達は 2380 万プードなので 70 万プードが余剰となる。一方で西シベリアでは小麦とライムギ 5000 万プードが調達されると予想する（計画では 6180 万プード）が、消費量 3490 万プードを除く余剰 1500 万プードのうち中央アジアに 500 万プード、ウラルに 1000 万プード搬出の予定だ。このためウクライナ、北カフカースから極東地方に穀物を輸送する必要が出てくるが、これは絶対的に不適切で、輸送条件からみてもまったく不可能だ。ウクライナから穀物を輸送するには 8000 台の貨車が必要だ。よって 870 万プード（1000 万プードのうち 130 万プードはすでに輸送された）の購入に関する問題を提起するよう願う。この量の穀物を、承認された輸出に追加して、我々は南部の港から運び出すのだ〔筆者注：極東より距離の短い外国の輸出先を意味すると思われる〕［ГАРФ, 5446/13a/660/9 и об.（注 7）］。

以上のチェルノーフの分析には、ウラルまでのロシア西部における調達量、必要量に関するデータが欠けているが、次の表 1 のようにまとめることができる。

ソ連国内で穀物生産に余力のある地域から自給できない地域へ穀物が輸送されていたが、各地

表1（単位1万プード）

	中央ロシア、北カフカース、ウクライナ	中央アジア	ウラル	西シベリア地方	東シベリア地方	極東地方
域内調達量				5000	2380	620
域内必要量				3490	2310	1600+400=2000
余剰、他所からの受領等		西シベリアから500	西シベリアから1000	5000−3490−1500=残余10	余剰70万	1230万消費、140万在、300万移動中

域の収穫高の変化が地域間の穀物量のやり取りにも影響を与えていたことがわかる。極東には東西シベリアから余剰分が送られていたが、比較的余裕のあった西シベリアから西側（ウラルや中央アジア）に穀物が輸送されると、極東への輸送分が減少してしまう。それよりもさらに西にある地域から極東に穀物を輸送するのは困難かつまったくの無駄であるので、黒海の港（ウクライナ等）からは欧州へ輸出し、それによって獲得した資金で、極東のために外国から穀物を購入することを提案したものだった。その1か月後の11月28日にソ連人民委員会議は布告No.1030を採択した。

①ソ連供給人民委員代理フロプリャンキン〔Хлоплянкин, Михаил Иванович、1892-1938（注8）〕、ソ連交通人民委員代理ミローノフ〔Миронов, Иван Никитич、1893-1937〕は、第4四半期の極東地方への工業製品と食料、特に塩の積み込み量と期間を正確に確定すること、②南部からの追加的な輸出資金による極東地方への輸入についてのヴォルコフ（注9）の提案を外貨小委の検討に委ねる［ГАРФ, 5446/12a/272/2、ГАРФ, 5446/13a/660/2］。

上述の通り10月17日に問題提起したチェルノーフはこの問題について12月2日のソ連人民委員会議議長代理クイブィシェフ（Куйбышев, Валериан Владимирович 1888-1935　以下ことわらないかぎり、弟ニコライではなくこの兄ヴァレリアンを指す）への覚書で、西シベリアにおける穀物調達がさらに期待外れで5000万ではなく4150万プードになりそうだと述べ、改めて極東地方のために外国で購入する870万プードと同じ量の穀物を南部の港から輸出するよう求めた［ГАРФ, 5446/13a/660/8］。これらの議論を経たあとの1931年12月16日、ソ連人民委員会議総務局長代理レプレフスキー〔Леплевский, Григорий Моисеевич、1889-1938（注10）〕を議長とする小委（参加者はチェルノーフ、ボーエフ〔Боев, Иван Васильевич、1892-1938（注11）〕、外国貿易人民委員ローゼンゴリツ〔Розенгольц, Аркадий Павлович、1889-1938（注12）〕、エクスポルトフレープ〔穀物の輸出に従事〕のグレーヴィチ Гуревич、ソユーズフレープ〔全ソ国営株式会社、穀物調達に従事〕のヴィンニコフ Винников）は、「極東地方への穀物輸送について」、次のように決定した。

① 850 万プードの穀物（穀粒の形態）を極東地方のために外国で購入することが不可欠だと認める、②政治局が承認した穀物の年間輸出プラン以上に、この量の穀物を外国で売却するために供給人民委員部はエクスポルトフレープに渡すこと（ボーエフの付帯意見：そのために、極東地方のために購入する 850 万プードの穀物購入費と同額の穀物をエクスポルトフレープに引き渡すこと）、③外国貿易人民委員部は、いかなる外貨上の損失をも予防すべく、このオペレーションの期間、手続きを確立すること、④極東地方への穀物提供の期間、供給人民委員部からエクスポルトフレープへの引渡し期限、引き渡される穀物の構成に関してボーエフとチェルノーフは二日以内に確定すること［ГАРФ, 5446/13a/660/1.］。

実際に極東地方では穀物調達等に関して多忙を極めていた。1931 年 12 月 29 日、極東地方党委第一書記ベルガヴィノフ（Бергавинов, Сергей Адамович、1899-1937）はスターリンに次のように打電した。

穀物調達、木材調達が進まず、春の漁や播種キャンペーンに真剣に準備せねばならないため、全ソ党協議会に私が欠席することをお許しください。多くの時間がとられ、モスクワには最近いたばかりだからです。ブリュッヘルの健康が悪化し、彼は今すぐ治療する必要があります。さもないと 1–2 ヶ月後に隊列から長く離れることになります。春までサングルスキー、メジスが軍の指揮をとることができます。2–3 ヶ月彼が軍にいなくてもよいと党中委が認めるならば、我々は［極東］地方党委の全体会議で彼を全ソ党協議会の代表に選び、大会後に彼は病院で治療せねばなりません［РГАСПИ, 558/11/42/99］（注 13）。

これにスターリンも理解を示し、ブリュッヘルについて言及してはいないが、「協議会には来なくてもよいです。軍事問題に関する長文の電報を送らないようお願いする。自分の問題に取り組み、軍人には自身の仕事に取り組ませてください」と返信した［РГАСПИ, 558/11/42/98］。1932 年 1 月 20 日、スターリンはさらに「極東と東シベリアにおける新たに生じた状況を考慮し、党中委はレオーノフ、ジーミン同志には協議会出席のためにモスクワに来ないよう提案する」と打電した［РГАСПИ, 558/11/42/118］が、この二人は東シベリア地方の指導者（注 14）であり、「極東と東シベリアにおける新たに生じた状況」とは、満洲事変勃発による対日戦争準備に他ならない。

もちろん、現地に残った指導者には、中央が求める仕事の遂行を求めた。1932 年 3 月 11 日、スターリン、ソ連人民委員会議議長モロトフ（Молотов, Вячеслав Михайлович、1890-1986）は東シベリア地方党委書記レオーノフに、「カザフスタン、極東地方への小麦の種子の輸送、それに人民委員会議の備蓄に春蒔き小麦を蓄えることは、遅くとも 3 月 15 日までに至急無条件に実行せねばならない」［РГАСПИ, 558/11/43/11］と打電したが、さらに 3 月 15 日にスターリン、モロトフは、レオーノフ、ジーミンに、次のように打電した。

我々は貴地方の穀物資源の状態を知っている。連邦の種子の資源は完全に底をついた。カザフスタンへの種子の輸送量を減らして欲しいとのあなた方の要請にはまったく応えられない。問題の検討をやめ、遅くとも3月18日までにすべての命令を実行するよう提起する。遂行についてただちに電報で連絡されたし［РГАСПИ, 558/11/43/18］。

表1に示した以外に、中央は東シベリア地方にカザフスタンへの種子提供まで求めていたことがわかるが、ソ連東部の穀倉地帯西シベリア地方も厳しい状況に置かれていた。上記の電報より前の3月13日、スターリン、モロトフは西シベリア地方のエイヘ、グリャディンスキーに、次のように打電した。

新収穫まであなた方の穀物が不足するということを我々は考慮し、貴地方へヨーロッパ・ロシアから消費のためのライ麦を適時に運ばせる。ソ連全土で春蒔き小麦の資源はすでに底を突いており、春蒔き小麦が存在する貴地方を犠牲にしてのみウラル、カザフスタンへの種子の支援が可能だということをあなた方は考慮すべきだ。ウラル、カザフスタンは穀物事業衰退のおそれがあり、外部からの春蒔き種子の支援なしにはやっていけないことを御存じだろう。これを考慮し、党中委と人民委員会議は西シベリア地方の指導者たちに、少なくとも3月18日までに貸付種子を外の州へ運び出すようにとの中央の指示を無条件に実行するよう義務づけ、遂行について連絡するよう要請する［РГАСПИ, 558/11/43/13-15］。

この当時の極東地方における食料供給の深刻な状況については、1931年12月27日にオゲペウ（ソ連人民委員会議附属合同国家政治局）議長第一代理アクーロフ（Акулов, Иван Алексеевич、1888-1937（注15））がソ連人民委員会議議長モロトフに送った報告からも判明する。

製パン工場の存在しない北部辺境はとくにそうだが、極東の供給は困難を抱え、1931年は極東地方自体で穀物調達のテンポが遅かったため、穀粒と穀粉の不足分は20万tから21万tに上る。極東地方の北部及びカムチャツカでの状況は危機的で、スイフン地区のイリイチェフカ村のダリウーゴリの炭田では80人が商品供給の悪さが原因でストライキを起こした。同じ地区のポクロフカ村ではゼルノトラスト〔Зернотрест 穀物ソフホーズ国家合同のことで、1928-31年に存在した〕の米国プランテーションの灌漑水路建設に従事していた60人の労働者が食料を受け取らなかったため、村で施しを求めている。オリガ、スーチャンの漁業地区でも食料、とくに穀粉が欠乏し1日の蓄えしかなかった。これに加えて給与の未払いのため（サハリン株式会社では100万ルーブルにも達する）、労働者にはストに打って出ようという気分が生まれ、そのような性格の行動も生じた。サハリンのホーエンスクでの木材調達では、12月1日に協同組合の複数の扉に、日本を志向し、ソヴィエト政権、共産主義者との闘争を呼びかける反乱的性格のビラが見つかった。労働者に対する未払い給与の解

消、極東地方の遠隔地住民への食料供給改善のため早急に対策を練ることが必要だ」。

モロトフはこの文書に上書きし「コピーをクイブィシェフへ。極東地方の供給に関する方策を至急取られたし」と指示した［ГАРФ, 5446/27/32/94-95］。ビラにある「日本を志向」する文言とは、食料さえ十分に供給されず、給与もろくに支払えないソヴィエトシステムに憤り、島の南半分を支配する日本ならば飢えから救ってくれるかもしれないとの労働者の強い不満を示すものだろう。そのようなビラが掲げられたことに、ある程度の危機感を執行部に植え付けただろう。この時期の特別赤旗極東軍を中心に兵士や、下級指揮官の中にも、ソ連の軍事力への疑いや、日本軍の技術的優位性への信仰も少なからず存在していたことが、軍の政治部や治安機関によって収集、記録され指導部に伝えられていた［寺山 2021］。本稿の冒頭で紹介したガマルニクも極東地方における非常に深刻な食料不足について伝えていた［寺山 2023a：62-70］。ちなみに 1931 年 11 月 15 日、ソ連供給人民委員ミコヤン（Микоян, Анастас Иванович、1895-1978）はモロトフに、同日現在の備蓄がモスクワではライ麦粉 10 日、小麦粉 28 日、レニングラードではライ麦粉 14 日、小麦粉 11 日分しかなく 2 か月かけて 1 か月分の備蓄を蓄えることができなかった原因は交通人民委員部の働きの悪さだと述べている［Кондрашин В.В. 2011a:No.360］が、ガマルニクは 1933 年 3 月 3 日、極東地方に穀物や飼料の備蓄は 4 日分しかないと述べ、穀物の緊急輸入を訴えていた。ガマルニクが打電した相手は交通人民委員代理でザバイカルで活動中のキシキンだったが［寺山 2023a：62］、ミコヤンが食料事情の悪さに関して交通人民委員部、とりもなおさず鉄道の働きの悪さに原因を見いだしたように、極東地方にとってはシベリア鉄道［当時のシベリア鉄道は、東からウスリー、ザバイカル、トムスク、オムスク鉄道と管轄が分かれていた］の輸送力の限界が大きな問題であった［寺山 2022b］。

このように食料事情が厳しい極東地方に対してもスターリンは厳しい対応を求め、1932 年 2 月 27 日彼は極東地方のベルガヴィノフに、次のように打電した。

> あらゆるデータによれば、貴地方は種子の収穫という見地から最も遅れている。いたるところで人々が活気づき、成功裏に種子を集めているが、貴地方では麻痺状態にあるようだ。あなたはあれこれの仕事に手を出し、種子を集め播種に向けて準備するという重要なことを見落としておられる。中委は種子の収穫に関する緊急的な方策、急転換を求めている。講じられた対策について連絡されたし［РГАСПИ, 558/11/42/130］。

一方でスターリン、モロトフはガマルニクの訴え［寺山 2023a：65］に応え、1932 年 3 月 19 日、「ゴスフォンド（国家備蓄）から 1500 トンのエン麦を借り、東シベリアから積み込まれ、道中にあるエン麦で 15 日後にそれを補充することに反対はしない」と打電した［РГАСПИ, 558/11/43/22］。備蓄は解除されたあと、必ず補充して元通りにすることが求められていたことが

この決定からも判明する。さらに3月22日、スターリン、モロトフは極東のガマルニク、フロプリャンキンに対し、次のように打電した。

> 軍部のすべての需要を含め、2月～6月に極東地方へエン麦を41000トン輸送することにし、このうち2月1日～3月15日に12200トンが積み込まれた。調達委員会は3月15日～4月1日に3000トンを積み込む予定で、2月1日～4月1日に計15000トンが運ばれることになる。26000トンの輸送が第2四半期に残り、東シベリアに手配された。調達委員会は交通人民委員部とともに、毎日30貨車分を積み込むこととした。濃厚飼料のフォンドを補充するため4000トンの油粕を利用することも許可する。満洲で穀物として5000トンのエン麦を購入することも許可する。エン麦はすべての州で非常に不足し、あなた方の所では最も不足している穀物なので、我々はこの計画の実行をあまり期待していない。地方の資源に圧力をかけられたし。さもないとエン麦なしに残される危険がある［РГАСПИ, 558/11/43/23］。

これも3月17日のガマルニクによる問題提起［寺山2023a：64-65］に対するスターリンの回答であった。ガマルニクが油粕だけでなく糠の利用まで提案するほど、食料事情は逼迫していた。このスターリンの電信にあった外国（満洲その他）における穀物購入が次節での問題となる。その前に若干時期は後にずれるが4月7日、スターリンがベルガヴィノフに再度、極東地方における播種に力を入れるよう促した次の電報を紹介しておきたい。とにかく極東地方における食料の自給能力を高めるため、播種に全力を挙げることを求めていることがわかる。

> 仕事であれこれ手を広げず、播種プランの実行に全面的に注力するよう要請する。我々は外の諸州からの穀物によっていつでも極東地方を支援できるわけではないということを考慮されたし。極東地方は自分たちで穀物と飼料を確保すべきである。この点で今年は転換点になるべきだ。なんとしてもこの目的を達成する必要がある。あらゆる作物の播種を成功裏に実行することが地方党委の今の重要な課題であると中委は考えている。他のあらゆる仕事を後回しにして、コルホーズ、ソフホーズ、それに個人農分野でも播種の完遂に向けて勢力を動員されたし。昨年貴地方で穀物は収穫されないまま残された。今年これを許してはならない。昨年の未収穫の原因を報告し、全穀物を期限内に収穫するために今年は何をすべきなのか我々に連絡されたし。脱穀機、コンバイン、トラクターが必要ではないだろうか？農業関係者やボゴモルキン（注16）と話し、要求をお知らせください。ボリシェヴィキ的に播種に着手されたし［РГАСПИ, 558/11/43/41］。

2.2. 外国からの穀物輸入

1931年10月20日付のチェルノーフによる説明の中ですでに穀物輸入を求めていたのは既述

の通りだが、ここでは輸入についてその後の経過をたどることにする。ソ連供給人民委員ミコヤンは 1932 年 3 月 5 日、ソ連も経営に関与していたハルビンの中東鉄道理事会に極東のために小麦を購入するよう打診した。

> 会社かソ連の経済機関を通して満洲で至急、あるいは分割で 300 万プードの小麦を購入しウラジオストックに運ぶことはできるだろうか？小麦の半分以上は小麦粉であることが望ましい。もし可能ならばすぐに購入し、ウラジオストックのソユーズフレープの管轄下へ送られたし。至急回答を待つ［Кондрашин В.В. 2011b: No.650］。

ミコヤンの名前でこのような電報を中東鉄道に送ったことを同日スターリン、モロトフ、ヴォロシーロフ（Ворошилов, Климент Ефремович、1881-1969、陸海軍事人民委員）はハバロフスクのガマルニクに伝え「彼ら〔中東鉄道関係者〕と連絡をとり、実行を監視されたし」と指示している［РГАСПИ, 558/11/43/1］。既述の通り 1931 年 12 月にレプレフスキー小委は、極東地方のために 850 万プード（13 万 9230 t）の穀物購入が必要だとみなしていたが、この段階で三分の一に近い 300 万プード（4 万 9140 t）へと購入量が引き下げられている。この決定は黒海から極東への 3 万トンの海路の穀物輸送のキャンセル、同量の西側への輸出とセットになっていた［1932 年 3 月 14 日の政治局決定：寺山 2000a］。一方で、本来は極東への穀物供給地であった西シベリアでも既述の通り調達不振は不振にあえいでいたが、これに関して労働国防会議は 1932 年 4 月 22 日、次のように決定した。

> ①例外措置として、西シベリアのコルホーズへ追加的に無利子で食料をライ麦と小麦 1 万 6000 t、キビ 8000 t の規模で貸し付ける、②ライ麦と小麦は西シベリアの国家フォンドから 3300 t、東シベリアの国家フォンドから 3900 t、中流ヴォルガの国家フォンドから 8800 t、キビはザゴトゼルノ〔穀物調達販売全連邦事務所〕の商業リソースから放出する、③国家フォンドは外国で 1 万 6000 t の小麦、ライ麦を購入して再興する、④西シベリアの諸都市、労働者センターへの現行の供給を保証すべく、州内の非常用 неприкосновенный フォンドから 8000 t を備蓄解除する、⑤最重要の新建設、クズバス、鉄道建設に対して新収穫までの飼料供給を保証するため、備蓄委員会の備蓄から 5000 t のエン麦を放出する〔国家フォンド、非常用フォンドについては後述する〕［ГАРФ, 5674/9/22/33］。

極東への供給どころか、域内で備蓄解除した上に、周辺地域（東シベリア、中流ヴォルガ）からの支援を仰ぐほど西シベリアの状況は深刻だった。ここでも輸入に言及されている。西シベリアへ果たしてどこから輸入するのだろうか？　4 月 29 日の政治局決定によれば、外国貿易人民委員部は極東で 350 万プード（ここでは 300 万ではなく 350 万となっている）の穀粒を購入し、ゴスバンクはそれに応じた外貨の送金を保証するとともに、

「外国貿易人民委員部はペルシャ〔イランのこと〕で購入する小麦から300万プードを調達委員会に渡すこと、ペルシャで購入する穀粒を商品でカバーするため、商品フォンド委員会は年間・四半期計画で承認された以上に、追加的に180万金ルーブル分の各種商品を1932年5月中、おそくとも6月1日までに輸出に回すこと、外国貿易人民委員部は極東及びペルシャで購入した小麦が5～6月中に到着することを保証すること」、「カスピ海のペルシャ岸で渡されるすべての穀物を、水運人民委員部は1932年7月1日までにバクーに運ぶこと、エクスポルトフレープの要求にしたがい交通人民委員部は国境とタヴリーズ間のペルシャ線〔タヴリーズとロシアのジュリファの間には1916年に鉄道が開通していた〕に、順番を度外視して充分な量の空車両を引き渡すこと、エクスポルトフレープには穀物購入の取引実施のためペルシャへ穀物卸の専門家8人の出張を許可する」〔そして決定の最後にはウクライナの負担軽減策も含まれていた（注17）〕［РГАСПИ, 17/162/12/115-116, 125］。

ペルシャで購入された穀物は無事に西シベリアに送られたのかとなると、そうでもないようだ。政治局は5月16日、次のように決定した。

ペルシャで購入した300万プード〔49140 t〕の穀物のうちザカフカースへ200万プード、100万プードをモスクワへ運ぶ」、「外国貿易人民委員部には①ウクライナの諸港にある小麦3万5000 t（ウクライナへ供給するため）、②レニングラードにある3万tの小麦（レニングラード、モスクワに穀粉を供給している製粉所に5月に1万5000 t、6月に1万5000 tを搬出するため）の放出を許可する〔разваррантировать という用語を使用。「warrant」から、商品の収容解除の意味か？〕（注18）」［РГАСПИ, 17/162/12/132］

さらに6月1日政治局は、「7月1日までに300万プードの穀物をペルシャから輸入するとの政治局決定を断固として確認し、キッシン（注19）には自身の来訪を吹聴せずにバクーに赴き、穀物購入問題を組織する」よう指示した［РГАСПИ, 17/162/12/152］。この段階でも購入が完結していなかったようだが、ソ連時代に刊行された国際貿易に関するデータによれば、ソ連は1932年にイランから2万8627 t（=174万7680プード、349.5万ルーブル）の穀粒を輸入しており［Внешняя торговля 1960: 901（注20）］、これを信じるならば、予定していた300万プードには届かなかったことになる。

一方、上記の極東での購入作戦は無事に成功したため（注21）、ルードゥイ、クズネツォフ、ヴァルコフに政治局は1932年5月4日感謝の意を表明した［Кондрашин В.В. 2011b: No.651］。さらにスターリンは5月8日、東シベリア地方党委書記のレオーノフに「すでにカナダで300万プードの穀物を購入し、それらは極東地方、東シベリア地方のためにウラジオストックに入る。自分の分を受け取られたし。西シベリアへの輸送命令も実行されたし」と打電した［Кондрашин В.В. 2011b: No.653］。先の4月22日の労働国防会議決定にある西シベリアのための穀物輸入先は、ペ

ルシャではなく、このカナダである可能性が高そうだ。

一方でチェルノーフは 5 月 19 日、外国で 750 万プード購入され、うち 100 万プードは東シベリア、600 万プードは極東地方向けだと極東地方党委書記ベルガヴィノフに伝えた［Кондрашин B.B. 2011b: No.656］。実際、ソ連はカナダから 1932 年に小麦 44368 t（270 万 8689 プード、707.8 万ルーブル）を輸入している［Внешняя торговля 1960: 1042（注 22）］。そしてスターリンは 5 月 22 日、100 万プードは東シベリア分だとの上記チェルノーフの指示は中央委員会も承知していると述べ、東シベリアへの発送について報告するようベルガヴィノフに念を押した［Кондрашин B.B. 2011b: No.657］。

このようにスターリンは極東からは東シベリアへ、東シベリアからは西シベリアへ中央の指示通りに穀物を発送するよう命じており、現地で勝手に消費してしまうことを懸念していたことは明らかである。アルゼンチン、アメリカ合衆国からの輸入は確認できなかったが、1932 年にソ連はオーストラリアから 51678 t（315 万 4945 プード、810.3 万ルーブル）の小麦を輸入［Внешняя торговля 1960: 1132（注 23）］していることは注目に値する。ソ連がヨーロッパに穀物を輸出して外貨を稼いでいる以上、オーストラリアからの穀物はスエズ運河経由でロシア南部に運ばれたとは考えにくく、カナダからの輸入同様、ウラジオストックに運ばれた可能性が高い。統計が当時の輸出入をすべて反映しているならば、イランからの 175 万プード、満洲からの 104 万プード（注 21 を参照のこと）、カナダからの 271 万プード、オーストラリアからの 315 万プードの輸入が確認できる。計 865 万プードとなり、チェルノーフの述べた 750 万プードを約 115 万プード上回るが、これは 5 月 19 日の彼の発言以降の輸入分の可能性もある。

以上の経過をたどると、国内におけるやりとりだけでなく、必要ならば外国からの輸入に頼ることでスターリン指導部は危機的状況の回避に努めようとはしていた。大飢饉のさなかの飢餓輸出だけでなく、輸入という側面にも着目すべきだろう。もちろん圧倒的に需要が上回っていたことは確かで、多数の犠牲者を出すことになったが、食料をどこに運んで備蓄するかという問題については、最前線の後背地となる極東地方、或いはモンゴル（注 24）が優先されたのではなかろうか。

2.3. ソ連極東で食料供給を受ける人数

本節では極東地方に限定し、食料供給を受けていた人数について検討することにしたい。1932 年 2 月 26 日、極東地方ソヴィエト執行委員会議長ブツェンコ（Буценко, Афанасий Иванович、1889-1965（注 25））がモロトフに極東地方の状況について説明した。概要は次の通り。

> 国防事業に邁進しており、休日もなく、執務室を出るのは夜中 1 時かそのあとになることもあり、諸問題を一人で手早く片付けることが多い。自らも動員されたとみなし、地方強化のため現在求められていることを最大限行うつもりだ。2 月 1 日まで各地の木材調達現場、農村ソヴィエトを訪問し、圧力をかけているものの木材調達の作業は遅れている。農村では

住民が「干渉、日本人」をひどく恐れていることは「満足すべき」だが、食料の到着が遅れ穀物が6-8日分しか残っておらず、給与の遅配は2000万ルーブルに上るほど深刻だ。今年中に満洲からの搬入を期待できない種子をソ連中央から輸送することが望ましい。農村における人材不足は慨嘆すべき状況で、国防事業に全精力を集中しているため執行委員会総会も7か月間開いていない［ГАРФ, 5446/13a/1268/9 и об.,8 и об.,7］。

そして別の文書でブツェンコは上述した木材調達問題について、モロトフ、それに極東地方ソヴィエト執行委員会への代表オルロフ（注26）に対し、

供給人民委員部がソユーズ・セリストロイトレスト〔農業公共部門建設国家トラスト〕を中央管轄の供給に含めなかったため、赤軍建設の準備作業が破綻の直接的脅威にさらされている。木材40万m^3の自己調達は19％のみ、その輸送は3％実行されたに過ぎない。順番を度外視した突撃建設〔最も重視された建設や事業のことで、人的・物的資源が集中投下された〕に採用して問題の解決を早め、木材調達への供給を早急に解決すること［ГАРФ, 5446/13a/1268/2］、以上を要請した。

中央から課された課題を遂行する義務を負った地方組織は労働者に好待遇を提供し、事業の完遂を目指していた。したがって中央が責任を持つ食料配給のリストに掲載されることがその組織にとっては重要であり、国家としても、国防事業等重視する事業に従事する労働者には食料を含む供給面で様々な優遇策を講じることになる。先のブツェンコの覚書についてソ連人民委員会議総務局長代理と思われるチェルノスヴィトフ（注27）は、依然として極東地方への食料輸送には問題があると述べた。そして次の【表2】のデータを示し、極東地方に課せられた作業遂行に必要な人数と、供給人民委員部が供給を認める人数に差があることについて言及し、

ダリウーゴリ［極東の石炭採掘企業］の労働者は、中央管轄の供給にとられず、極東地方には、超突撃的建設があるのに、特別リストの供給がない。極東地方への工業移住に関する問題は最近の次官の評議会で審議からはずされたが、極東地方にとっては大きな意義がある。というのも経済機関の多くは、極東地方への労働者の季節的輸送のみ実行し、工業移住の意義を過小評価しているからだ。労働力についてのこれまでの数年の過ちを避けるためにも、この問題を検討すべきだ［ГАРФ, 5446/13a/1268/12-10］、

と述べた。国防上最も重要な作業に従事する労働者から順に特別リスト、第一、二、三リストと食料供給には差がつけられていた。極東地方は計41.3万人を求めていたのに対し、供給人民委員部は特別リストを認めず、第一、二、三リストの合計で約35.7万人しか認めなかったことを意味している。同人民委員部にとっても、責任をもって処遇する人数には限度があった。

表２　［単位は 1000 人］

リスト	極東地方の第一四半期における申請			供給人民委員部が定めたノルマ		
	労働者	その他	合計	労働者	その他	合計
特別リスト	22,8	28,2	51,0	−	−	−
第一リスト	60,8	53,1	113,9	40,3	34,6	74,9
第二リスト	24,6	18,8	43,4	17,0	8,0	25,0
第三リスト	52,6	152,8	205,3	78,0	179,0	257
合計	160,7	252,9	413,3	135	221,6	356,9

そして 1932 年 2 月 27 日、ソ連供給人民委員部は命令 No.9-823「極東地方で供給を受ける住民数の増大について」により、

> 3 月 1 日より第一リストに基づいて供給を受ける極東地方の建設労働者（ガソリンタンク建設の特別作業に従事）を 1000 人、第二リストに基づく 6000 人（赤軍コルホーズ建設に従事している建設労働者）を増やす。分野別合同はこの命令に応じて、追加的フォンドをすぐに割り当てるよう要請する［ГАРФ, 5446/13a/1268/4］、

と命じた。リストに掲載される人数が計 7000 人増えたが、極東地方が求める数字にはかなり及ばなかったといえるだろう。その後の議論の経過は不明だが、1932 年 3 月 4 日に労働国防会議は布告 No.170「極東地方における供給について」において、「②第 2 四半期における極東地方の供給総数を 41.3 万配給 пайка と定める」と決めており［ГАРФ, 5446/12a/272/1、ГАРФ, 5446/13a/1268/13］（注 28）、総数については、極東地方の要求が認められたと考えてよいだろう。

ソ連全土のデータは、1932 年 4 月 3 日の労働国防会議の布告から判明する。

> 金プラチナ産業、泥炭産業を除き、1932 年第 2 四半期に中央が管轄する供給を受ける住民総数を 3000 万 8400 人と定める。このうち特別リストは 915 万人、第一リストに 1054.96 万人、第二リストに 857.21 万人、第二リストの鉄道員、水運事業者 125.67 万人（うち労働者 30.04 万人、その他 95.63 万人）、軍幹部 38 万人、地質調査者 10 万人〔＊ 915＋1054.96＋857.21＋125.67＋38＋10＝3000.84 万人〕とし、各共和国、地方、州に分配する［ГАРФ, 5674/1/49/14-16］（注 29）。

ソ連全土で国家が供給を保証する人数約 3000 万人に対し、極東地方では 41 万ということなので、わずか 1.4％弱という微々たる割合となるが、労働者や供給物資の遠隔輸送には莫大なコストがかかるため、数字以上の意味を持っていたに違いない。また、これより前の 1932 年第 1 四半期に関しては、1931 年 12 月 26 日付のソ連供給人民委員部の布告によれば特別リスト 861 万人、

第一リスト924.6万人、第二リスト825.1万人、第三リスト117.3万人、さらに金プラチナ産業53.3万人、泥炭産業7.9万人、地質調査9万人、家族を含む軍指揮官38万人の計2836.2万人であった［Кондрашин В.В. 2011a: No.426］。こちらのリストは金プラチナ産業、泥炭産業を含んでおり、上記第2四半期と比較するとわずか1四半期の間に約200万人増大しており、人口増に見合う分だけ食料を増産していなければ、リストから除外されている一般国民に大きなしわ寄せがもたらされる可能性は大きかったと言えるだろう。

2.4. 極東及び東シベリアにおける食料産業の整備

1932年6月9日、供給人民委員ミコヤンが極東地方と東シベリア地方における食料産業企業の建設について覚書を提出した。「供給人民委員部は1932年に極東地方、東シベリア地方で一連の食料産業企業を建設中だが、国民経済的に大きな意義を有するだけでなく、国防力強化とも直接関係している。軍の部隊、国防建設、金、石炭、木材産業に奉仕する生産の組織と拡大を決めた」と述べ、国防強化にとってきわめて大きな重要性に鑑み、以下の【表3】に掲載された企業及び事業を「国防と関連した企業建設」に列挙すべきとした。要するに、このリストに掲載することで、特別の供給を受けさせるべきだ、ということである。

> 国防上の非常に大きな意義にもかかわらず、これらの工場への建設資材の供給は、早急な対策を講じなければ建設が破綻してしまうような状況にある。本年第3、4四半期に操業開始を予定している企業の建設さえ、供給人民委員部の建設全体に割り当てられた配分では保証できない。よって供給人民委員部は、これらの建設に従来以上の資金を割り当て、さらに必要不可欠な工場全体の設備を確保するよう要請する［ГАРФ, 5446/13a/1272/3-5］、

とミコヤンは強調した。【表3】にある冷蔵庫に関して、ウラジオストックには一日に150 tを冷凍し、12600 tを保管する冷蔵施設が1930年から建設中で1933年第2四半期に完成予定だった（当初予算820万ルーブル、実際には1200万ルーブルを要していた）。1932年9月に一日30 tの冷凍と2100 tの保管を開始したが、管理する技術職員や労働者のための住居がなかった［ГАРФ, 5446/13a/374/4（注30）］。食料の保管が効くため、冷蔵施設は極めて重要な施設となる。

ミコヤンが覚書を出す前の1932年6月5日、【表3】にもある製粉業についてソ連人民委員会議は、極東地方と東シベリアで労働者の穀粉需要を満たすため、「製粉用地拡大について」決定した。

> ①ソ連供給人民委員部は再建と大規模修理によって、一日当たりの製粉能力を極東で450 t、東シベリアで334 t引き上げ、遅くとも本年10月1日までに製粉用地拡大作業を終了させる。②ゴスプラン、財務人民委員部、供給人民委員部は第3四半期における食料産業の計画にこれらの作業を想定する。③重工業人民委員部は遅くとも本年7月1日までに、3

表３　ミコヤン提案の「国防と関連した企業建設及び事業」：東シベリア（1-6）と極東（7-15）

	工場と所在地	生産能力、特徴等
1	コンデンスミルク工場（カンスク）	年産 1000 万缶を製造し、そのすべてが極東の赤軍に供給される。
2	製粉コンビナート（クラスノヤルスク、カンスク）	東方では最初の大規模な工場となる。一日 400 t 分の製粉場を拡張し、東シベリアにおける穀粒すべての製粉を完全に保証するものではないが、それでも赤軍、国防建設、最重要の工業分野（金、石炭、木材）に奉仕することを可能にする。
3	冷蔵庫網の組織と食肉コンビナート（イルクーツク、ヴェルフネウーディンスク）	年間 3 万 t の肉製品を製造。東シベリアとモンゴルの家畜の骨付屠体の効率的な利用で製品出荷を伸ばし、極東地方へ生きたまま 3-4 千キロ移動させる現在のやり方をやめ、必要な貨車数を数倍減らす。
4	ウソーリエ製塩工場（イルクーツク近郊）	1931 年の生産 26000 t、再建中の工場による 1932 年の生産予定 4 万 t に対し、1933 年には 15 万 t の生産を見込む。東シベリアで 3 倍以上の塩の生産は、極東地方のポシェット湾にあるタリミ湖とウグロヴォイ湾（両地点ともウラジオストックに近い）での塩採取の組織化とともにウラジオストックへの海路の塩の運搬停止を可能にし、それによって現在チャーターに費やされている外貨を節約し、鉄道輸送の負担を軽減し、戦時には海路の塩の運搬が不可能となる東方での独自の製塩発展を保障する。
5	ヒキワリ企業（カンスク、ウソーリエ）	ヒキワリ作物の播種面積は拡大しているが、東シベリアに工業的ヒキワリ企業が存在していない。この工場は日産 100 t を予定し、そのかなりの部分が赤軍部隊やチェレムホヴォ炭田への供給に回る。
6	石鹸工場（イルクーツク）	年産 2 万 t で、東シベリア地方のすべての軍事部隊、その他の住民に供給する唯一の企業となる。
7	缶詰工場（スパスク）	年産 2000 万缶の野菜缶詰を生産（1933 年 1 月 1 日完成に向けて建設中）する。缶詰は極東の状況、特に極北（サハリン、コリマ、カムチャツカ）の気象条件を考慮すると、地元産野菜だけでは完全にまかなえないこの地域に野菜を供給する基本的方法の一つとして極めて不可欠である。
8	食肉コンビナート（ハバロフスク）	年産 1 万 t。 ハバロフスク近郊に駐屯する赤軍兵士部隊、沿海に存在する新しい国防企業の労働者、その他企業や輸送の労働者に基本的な食品を保障する。
9	製粉所（ハバロフスク）	一日 200 t を製粉する。
10	植物性油脂製造コンビナート（ニコリスク・ウスリースク）	6000 t のバター製造を予定する工場を建設中。この地方の油脂資源の増大とも関係し、自家発電所の電気エネルギーは、赤軍の需要を直接満たす。
11	乾パン・ビスケット工場（ハバロフスク）	年産 8000 t。赤軍及び北部遠隔地への供給を予定。
12	砂糖工場（ニコリスク・ウスリースクとアムール）	各々が日産 1 万プードの砂糖を製造。
13	タリミ湖製塩工場	
14	ウラジオストック冷蔵庫	
15		ディオミド湾における魚受入基地、ウラジオストック地区におけるヴォストクルィバへの移住者のための住宅。

台の蒸気ボイラー（2 台は 250 m^2 を加熱、1 台は 150 m^2 を加熱）〔穀物の乾燥または燻蒸のためか〕、250 馬力のエンジン 1 台、その他の設備を供給人民委員部の在庫から搬出する。④木材産業人民委員部は順番を度外視して、現場にすべての必要な材木を手配する。⑤供給人民委員部と交通人民委員部は「プリイスコヴァヤ」駅〔チタの東約 200 km に位置する〕

にある製粉所No.1への鉄道支線敷設について合意する。⑥極東地方執行委員会は250 kWの電力を製粉所に保証する。［ГАРФ, 5446/1/68/290、ГАРФ, 5446/13/1057/1（注31）］、以上である。

このように長時間輸送による穀粉の変質を避けるべく、製粉業を現地で整備することによりできるだけ穀粒による輸送に限定しようとしたものと思われる。一方でミコヤンの報告から約1か月後の1932年7月10日、政治局ではミコヤン、ソ連財務人民委員グリニコ（Гринько, Григорий Фёдорович、1890-1938）が報告し「極東と東シベリアにおける食料産業企業の建設について」検討、「この問題をソ連労働国防会議の検討に委ねる」と決定した［РГАСПИ, 17/3/891/5（注32）］。党から政府組織たる労働国防会議に作業が移管されたことを意味する。このような決定はしばしば見受けられるが、党組織と政府組織は一体化し、労働国防会議にもスターリン、モロトフら主要幹部が含まれているため、重要性の認識に変化はないと考える。政府組織を動かすのに好都合だったという可能性もある。その後8月20日、ソ連人民委員会議総務局のケルジェンツェフ（Керженцев, Платон Михайлович、1881-1940（注33））に対し、ソ連ゴスプラン国防セクター長ボトネル（Ботнер, Стефан Освальдович、1890-1937（注34））は、「食料産業企業の建設問題は、極東地方と東シベリアに関する政府決定執行を統制するヴォロシーロフの小委に引き渡された。ヴォロシーロフの小委は他の省庁と同じく、供給人民委員部が携わるすべての建設を検討し、労働国防会議に特別報告を出す予定だ」と伝えた［ГАРФ, 5446/13a/1272/2］。

それぞれの事業が順調に進んだわけではない。例えば極東で最初のスパスクの野菜缶詰工場は1931年9月29日、党中央委員会とソ連人民委員会議が建設を決定したが、1932年7月23日、供給人民委員部はソ連人民委員会議付属執行小委〔Комиссия исполнения при СНК СССР、1930年12月24日−1934年2月11日。政府決定の実行状況を点検する組織で、ソ連人民委員会議付属ソヴィエト統制小委Комиссия советского контроля при СНК СССРに再編された〕に対し、次のように報告している。

400 gの野菜缶詰2400万個を生産する予定のこの工場建設に着手したソユーズコンセルヴ〔Союзконсерв、缶詰産業全連邦合同〕は、工場操業に必要な300-350 kWの電気を、新たに建設されつつあるノヴォスパスク・セメント工場の発電所から受け取ることでソユーズツェメント〔Союзцемент セメント産業全連邦合同〕と合意した。ソユーズコンセルヴは工場本体の建設開始を8月、終了を1933年1月1日、技術設備の組み立て完了を1933年5月15日と計画し、必要な電力量の提供を求めたが、セメント工場は現在稼働中の3000 kWのタービン一基はセメント工場自体の活動にも不十分（本来ならば6000 kW必要）だとして、缶詰工場への電気は融通できないと同意書への署名を拒否した。

電力をセメント工場に頼るしかない供給人民委員部はこのような状況を説明し、あくまでも缶

詰工場への電力供給をセメント工場に促すよう求めたのである［ГАРФ,6760/3/27/6 и об.（注35）］。セメント工場ももちろん国防建設事業を担う点で重要であり、域内に大規模な発電所が存在しないことは、様々な施策を推進するうえで大きな障害となりえた［寺山 2023a：48-50］。

「国防建設」事業リストへの登録を求める意見もあった。1932 年 7 月 26 日ロシア共和国人民委員会議議長代理レベディ（Лебедь, Дмитрий Захарович、1893-1937（注 36））は労働国防会議に対し次のように請願したが、これも先に紹介したミコヤンの要請と重なるものといえるだろう。

> ツェントロソユーズ〔ソ連消費共同組合中央同盟〕はウラジオストックで 120 t、ニコリスク・ウスリースクで 60 t、チタで 60 t の製造能力を有する製パン工場を建設している。これらは建設終了後、地域住民だけでなく主に特別赤旗極東軍の部隊に焼いたパンを提供することになるが、ゴスプランやツェントロソユーズによる技術的な見落としのため、本年 5 月 16 日の労働国防会議の布告「国防に特化した узкооборонное 突撃建設」（No.532/174）のリストには含まれなかった。これらの工場建設の非常に大きな意義や、いち早い建設完了を求める労農赤軍参謀部の要望も考慮し、そのリストに加えてほしい［ГАРФ, 5446/13a/74/1］。

3. 極東地方と各種食料――塩、野菜・ジャガイモ

本節では具体的な食品ごとに、それぞれがどのように極東と関係していたのかについて検討することにする。

3.1. 満洲事変前のソ連極東と塩

先に紹介した 1931 年 11 月 28 日の人民委員会議布告にもある通り、現地で塩がまかなえなかった極東地方は穀物同様、それを外部から搬入する必要があった。漁業を例にとってみよう。1931 年 1 月 28 日、労農監督人民委員代理アクーロフ（このポストには 1929 年 12 月～ 1931 年 7 月、オゲペウ議長代理には 1931 年 7 月～ 1932 年 10 月）は、ソ連人民委員会議議長代理ルズタクに極東の漁業者を交えて作成されたデータを紹介するとともに、外国での塩の購入を提案した。

> 1932 年春までに漁業に必要な塩は 18 万 1000 t、極東に現存するのが 6 万 5000 t、このうち 5 万 t は動員備蓄として残す必要があり、16 万 6000 t を新たに搬送する必要がある。しかしシベリア鉄道を使った輸送にも限度があるため、海路 5 万 5000 t を輸送したいが、①エフパトリヤ〔クリミア半島西部に位置する港町〕からウラジオストックに船で輸送（1 t あたり 20-23 シリング）、②外国で購入（ポートサイド〔エジプト〕で 1 t 30 シリング、山東〔中華民国〕で 1 t 28 シリング）、③船を購入しエフパトリヤから輸送、以上の 3 つの方法のうち②の山東での購入が資金、時間を考慮すると望ましい」［ГАРФ, 5446/12a/409/8 и об.］。

これを受けたソ連人民委員会議の外貨小委は同年2月5日、ローゼンゴリツ、ソ連供給人民委員代理ロボフ（Лобов, Семён Семёнович、1888-1937（注37））、ソ連財務人民委員代理カルマノヴィチ（Калманович, Моисей Иосифович、1888-1937（注38））からなる小委に、極東への塩の輸送問題について検討を委ねた［ГАРФ, 5446/12a/409/7］。そして2月8日、外貨小委は最終的に次のように決定した。

①極東のソユーズルィバ〔Союзрыба 漁業・水産業全ソ国営合同〕のため3月～5月に6万1000tの塩を運ぶことが不可欠。②黒海から外国船で輸送。③プラン以上に2月に15万、3月に30万、4月に15万ルーブルを支出。③交通人民委員部はソユーズソーリ〔Союзсоль 全ソ塩業合同〕の命令に従い、ノヴォロシースク港へ2月20日までに塩を輸送。④この6万1000tではソユーズルィバの需要を満たせないので4月以降、必要量を調達できるよう、交通人民委員部、水運人民委員部はソユーズルィバと検討［ГАРФ, 5446/12a/409/1］。

要するに極東に近い山東で購入するよりも、黒海からの輸送を決めたわけである。それから半年後の1931年8月22日、労働国防会議附属移送委員会〔Комитет по перевозкам при СТО: 1931年3月13日～1933年9月26日。本委員会については寺山1998aも参照〕は、次に紹介する布告「極東への塩の輸送」を採択した。国産の塩を自国船舶で輸送し、外国船チャーターによる外貨支払いを回避するものである。

貨車1万7000台分の極東の塩の需要を保証するため1931年8月1日から1932年7月1日にかけて、①ソユーズソーリと交通人民委員部は、パヴロダール〔カザフスタン北部パヴロダール州ヤムィシェヴォ湖〕の塩を毎日1931年8-10月に貨車50台、1931年11月−12月、1932年1-3月に貨車30台、4-5月に貨車80台、6月に貨車50台、総計1万3500台を発送。②ソユーズソーリと水運人民委員部は1931年第4四半期にウラジオストックに5万1100tの塩を輸送（水運人民委員部は8月25日までに方法を労働国防会議に提出）、③ソユーズソーリと水運人民委員部はソヴトルグフロート〔Совторгфлот ソヴィエト商船隊全ソ合同〕の船舶で南部の港からウラジオストックに1932年第1四半期の間に1万1800tの塩を輸送（期間は水運人民委員部と合意すること）、④ソユーズソーリと水運人民委員部はスレーテンスク経由でアムール川に輸送することで極東のための塩の鉄道からの受け入れを組織（実行について20日ごとに移送委員会に報告）。⑤パヴロダールの塩の適時の輸送の責任をカゾソーリ〔Казосоль カザフスタン塩業〕支配人のスヴィリデンコ Свириденко、貨車の提供をオムスク鉄道長代理ニコノフ Никонов、船舶の提供をローゼンターリ〔Розенталь, Эдуард Фрицевич、1888-1938（注39）〕、エフパトリヤにおける適時の塩の積み込みをクルィムソリトレスト〔Крымсольтрест クリミア塩業トラスト〕長のコロレフ Королев、アルチョーモフ塩［今日のウクライナ・ドネツク州ソレダルで産出］に関して鉱山長ガダシ Гадаш に委任。

⑥パヴロダールからは極東向けの上記の量の塩以外にも、ソユーズソーリはシベリアの需要を 1932 年には完全にカバーできるよう第 3、第 4 四半期と 1932 年に最大限の量を 20 日以内に確定。⑦本年極東における漁期のために割り当てられた塩がどのように消費されたのかについて労農監督人民委員部に検査を委任。⑧ソユーズソーリとロシア共和国最高国民経済会議は、パヴロダール及びイルクーツクの塩の顕著な増産に関して必要な方策を 9 月 6 日に労働国防会議に報告。⑨ソユーズソーリは毎月 5 日に移送委員会に極東への塩の輸送プランの進捗状況を報告［ГАРФ, 5446/12/2064/4］。

いささか詳細な説明となったが、極東で消費される塩をこのようにカザフスタン、クリミア、ウクライナより鉄道や河川、海路を通じて運ぶことを計画していたことがわかるだろう。2 月に続いて黒海からの塩の輸送を計画していたことに変わりはない。

3.2. 満洲事変後のソ連極東と塩、全国的な塩不足と備蓄解除

満洲事変後に状況はどのように変化したのだろうか？　すでに引用したが、ソ連人民委員会議は 1931 年 11 月 28 日の布告で、「第 4 四半期の極東地方への工業製品と食料、特に塩の積み込み量と期間を正確に確定」するよう促していたが［ГАРФ, 5446/12a/272/2］、1932 年 1 月 8 日に政治局は塩を中東鉄道経由で 8 万 4000 t、極東に運ぶことを決定、現地に派遣したガマルニク、極東地方党委書記ベルガヴィノフには東シベリア、極東で塩の採掘に向けた方策を探るように指示し［寺山 2000a：68］、その約 1 週間後にスターリンは東シベリア、極東で金に糸目をつけず塩を生産するよう促した［寺山 2020：40］。それを受けてガマルニクは塩の採掘に関して様々な対策を講じた［寺山 2023：50-51］。一方で政治局は 2 月 13 日、「塩産業について」、次のように決定した。

①ソ連重工業人民委員部からソ連供給人民委員部への製塩業の移管についてのオルジョニキッゼ〔Орджоникидзе, Серго Константинович、1886-1937、1932 年初頭から重工業人民委員〕、ミコヤンの合意案を採択。②重工業人民委員部と供給人民委員部は 1 週間以内に中央委員会にその実行について報告。③東シベリアにおける製塩業に対し不可欠な設備を供給することについてのレオーノフ〔Леонов, Фёдор Григорьевич、1892-1938、東シベリア地方党委書記〕、ベルガヴィノフの要請を承認し、ピャタコフ〔Пятаков, Георгий(Юрий) Леонидович、1890-1937、ソ連重工業人民委員代理〕、ミコヤンには設備の数量、納入時期を確定するよう委任［РГАСПИ, 17/3/872/8］。

食料問題と関係が深い供給人民委員部の管轄へ塩産業を移管したものと考えられる。また東シベリア地方における製塩業に関する要請に、極東地方党委書記のベルガヴィノフが関与していることは、極東への塩の供給について当事者が強い懸念を抱いていた表れのようにみえる。そして 1932 年 3 月 8 日、政治局は「塩産業についての政治局の決定遂行」に関する問題を労働国防会議

の解決に委ねた［РГАСПИ, 17/3/875/12］。党から政府機関に解決を委ねた流れは、先の製粉業への対応と同様である。

一方で1932年4月8日、労働国防会議付属移送小委議長ウンシュリフト（Уншлихт, Иосиф Станиславович、1879-1938）はルズタクに、

> 極東における漁業の必要のため、4月と5月には2万7000tの塩を届けることが不可欠だが、これらは他の貨物と一緒に積載できず、それらを極東へ運ぶための別の蒸気船をソヴトルグフロートは有していない。計算によれば外国船をチャーターするよりも、外国で塩を購入するほうが安い。よって本小委は、必要不可欠な需要量、外国産の塩の購入の合理性を示す報告を供給人民委員部が外貨小委に提出することが必要だと見なす［ГАРФ, 5446/13a/793/3］

と再度、外国での塩の購入を検討するよう促した（移送小委議長としてウンシュリフトはここで極東への他の貨物輸送について言及しているが、それについてはここでは取り上げない）。これに対し、外国貿易人民委員代理エリアヴァは4月29日、「日本では塩の価格が約18シリング、輸送期間やチャーター料金の値上げ等を考慮すると不適切だ」と反対していたが、同日の外貨小委（議長ルズタク）は結局、この問題を議論から外し、塩の外国での購入は考慮しないことになった［ГАРФ, 5446/13a/793/1,4］。

政治局でも塩について検討されていたが（注40）、結局7月16日会議では、塩の採掘プログラムの完全な遂行、塩を必要とする地区への輸送、塩の正常な備蓄の構築に向けてあらゆる方策が供給人民委員部によってなされているとのミコヤンの報告を考慮にいれることになった［РГАСПИ, 17/3/892/8］。

極東だけでなく、全国的にも塩の供給は問題を抱えていた。1932年8月11日、ツェントロソユーズ幹部会議長のエプシテイン（Эпштейн, Меер Самуилович、1894-1939（注41））が労働国防会議附属商品フォンド委員会に製塩業の全般的な不振について報告した。概要は次の通りである。

> 採掘が極めて不十分であること、それとともに製塩業による消費地への塩の搬出、特に7月の搬出が急落したため、ツェントロソユーズ幹部会はこの問題を今月9日の労働国防会議の定例会議、その他の組織に対しても提起せざるをえなかった。現在いくつかの地域（ベラルーシ共和国では35の地区で塩がない、ウクライナ共和国はいくつかの地区で塩が不足し、中央黒土地方では塩の供給が深刻な状況にある、人民委員会議議長モロトフが貨車800台を積み込むよう特別の指示を出した等々）で生じた深刻な状況をいくらかでも緩和すべく、8月の第二旬間、備蓄委員会の備蓄から10万tの塩を必要なところへ送る必要がある（表を添付（注42））。この量の塩の割当について我々は備蓄委員会（ジブラク）と交渉に入ったが、そのためには備蓄委員会の布告が不可欠だ。この問題を至急検討し決定するよう要請するが、そのためにはこの問題を追加的に8月14日にフォンド委員会の定例会議の議題に載

せることが不可欠だ［ГАРФ, 6759/2/181/23］。

結局、この全般的な不振が備蓄解除に踏み切らせることになった。1932 年 8 月 25 日、「1932 年前半にかなりの量の塩が製塩業から十分に搬出されず、野菜の塩漬けの季節に入ったこと、地方には必要量の塩がない」ことを理由に、労働国防会議は備蓄委員会のフォンドから 3 万 3000 t の塩を備蓄解除することを決めた。その詳しい内容は以下の通りである。

①備蓄委員会の管轄下にある塩の現存備蓄から、2 万 9000 t は共和国、地方、州の消費協同組合連合の管轄下へ、4000 t はソリスブィト〔Сольсбыт、塩の販売に従事〕の管轄下へ送り、次のように割り当てる：レニングラード州 1000 t、西部州 3000 t、ウラル州 1000 t、中央黒土州 4000 t、北カフカース 2000 t、ダゲスタン 500 t、カザフスタン 1000 t、西シベリア 2000 t、東シベリア 1000 t、ウクライナ 1 万 500 t、ベラルーシ 5000 t、ブリャート・モンゴル 200 t、モスクワ（ソリスブィト）1800 t 計 3 万 3000 t。②消費地区へ最も迅速に塩を運ぶため、交通人民委員部は不可欠な数の貨車を確保し、共和国、地方、州の消費協同組合連合及び地方のソリスブィト事務所は、適時に塩を貨車に積み込んで奥地に運び込み、共和国、地方、州の執行委員会は塩の積み込み、積み下ろしに労働力を提供して奥地への運搬に協力すること、③供給人民委員部とツェントロソユーズは国内工業における消費を削減することで、広範な市場に追加的に割当てるべき塩の量を確定する問題を 3 日以内で検討すること［ГАРФ, 5674/1/51/248-249］。

3.3. その後のソ連極東と塩

備蓄解除するほど不足していた塩について、その後の詳しい供給状況はわからないが、1933 年 2 月 23 日政治局は「極東への穀物と塩の搬送について」決定した。穀物については後述するが「極東へ海路 4 万 8000 t の塩を 3 月に 2 万 4000 t、4 月に 2 万 4000 t 輸送する。極東地方のための塩を、輸送にかかるチャーター代金よりも安く外国貿易人民委員部が東方で購入できるのならば、この問題の解決を外国貿易人民委員部と供給人民委員部に共同で委ねる」という内容である［РГАСПИ, 17/162/14/66、寺山 2000a］。そして半年後の 1933 年 10 月 26 日、労働国防会議は布告 No.928-217「極東地方における塩の採掘と搬送について」を採択した。その概要は以下の通りである。

①タリミ湖における製塩工場の建設は 1934 年 8 月 1 日までに終了し、1934 年には 3000 t、1935 年には 1 万 t の塩を生産する予定だとのソ連供給人民委員部の報告を考慮する。②ソ連供給人民委員部は極東地方の別の地区における水文地質学的探査の結果を検討し、タリミ湖と同じタイプの製塩工場をさらに 3 つ 1934 年に建設することについて、基本建設 капитальное строительство の枠内で建設初期に必要な補助金を見込んで、1934 年 3 月 1 日

に労働国防会議へ提出する。③外国貿易人民委員部は外国で7万2000tの塩を購入し1934年5月1日までに極東地方へ運ぶこと（毎月1万2000t）。この目的のために42万5000ルーブルの輸入総量を割り当てるが、そのうち28万3000ルーブルは1934年のソ連供給人民委員部の割当とする。④ソ連供給人民委員部は1933年第4四半期に、承認されていた第4四半期の計画以上に4万tの塩を輸出すること。⑤交通人民委員部は輸出用のすべての塩を適時に搬出すること［ГАРФ, 5674/9/28/12］。

タリミ湖は1932年初頭にガマルニクが極東地方に派遣された際、スウェーデン製のボーリング装置を急遽取り寄せて開発を進めた製塩地だった［寺山2023a：50-51］。

1933年12月31日、ローゼンゴリツ外国貿易人民委員はソ連人民委員会議議長に対し、「この10月26日の布告を実行するため、外国貿易人民委員部は極東地方のために2万9000tの塩を購入し、今後4万3000tを購入する義務がある」が、計画以上の塩の輸出は大きな困難に直面すると述べ、「①残りの4万3000tの塩の輸入と計画以上のソ連産塩4万tの輸出の同時中止。②南部の港から極東地方への4万3000tの塩の発送に外国貿易人民委員部がチャーターする外国船を利用すること」を求めた［ГАРФ, 5446/15a/866/2］。上記1933年10月26日の布告にはどこで生産した塩が輸出されるのか明示されてはいないが、西で輸出し、東で輸入するという穀物と同じパターンを踏襲していたものと思われる。直面した大きな困難とは、穀物と異なる販路の拡大のことだろうか。ともかくローゼンゴリツの疑問が、この場合は合理的だとみなされたと思われる。1934年1月4日、労働国防会議は布告No.4/2cで1933年10月26日の布告を変更、次のように決定した。

①外国貿易人民委員部は極東地方のための2万9000tの塩を輸入すること、残りの4万3000tの輸入、及び計画以上の4万tのソ連製の塩の輸出は取りやめる。②供給人民委員部は極東地方へ残りの4万3000tの塩をソ連の南部の港から輸送すること、外国貿易人民委員部はこのためにすぐに次の期限で外国船をチャーターすること（1934年2月1日7000t、2月15日7000t、3月1日7000t、3月10日7000t、3月20日7000t、4月5日8000t）。③交通人民委員部は上記の期限に合わせて、ドンバスからソ連の南部諸港へ塩を積み込み、送り届けること［ГАРФ, 1235/141/1582/11、ГАРФ, 5674/9/29/2、ГАРФ, 5446/15a/866/1］。

統計を見ると1934年に米国から2万4532tの塩を輸入しており［Внешняя торговля 1960: 1077（注43）］、これがソ連極東に送られたものだろう。人間の生活にとって、死活的重要性を有する塩の供給をとってみても、ソ連全土を視野に入れた調達の複雑さ、困難さを理解できる。

3.4. ソ連極東への野菜、ジャガイモ供給

次に野菜、ジャガイモの例を取り上げることにしよう。1932年8月4日陸海軍事人民委員代

理カーメネフ（Каменев, Сергей Сергеевич、1881-1936）より労働国防会議議長モロトフへの覚書によれば、同年 6 月 7 日、野菜の予約買付量を削減するとのソ連人民委員会議と党中央委員会の布告（極東地方は削減地域に含まれず、従来通り 2 万 5000 t の調達を義務付けられていた）を、極東地方党委員会と極東地方ソヴィエト執行委員会は予約買付の完全な停止と受け取り、7 月 2 日付の地元紙で周知したため野菜の予約買付は完全に停止された。通常、労農赤軍軍事経済局とツェントルプロドオーヴォシチ（Центрплодоовощ 果実・野菜調達の中央機関）が調達価格について合意しているが、予約買付が完全に停止されたため、特別赤旗極東軍の軍事経済局長は地方機関たるダリクライプロドオーヴォシチ（Далькрайплодоовощ 極東地方の果実・野菜調達機関）に軍への割高な野菜納入を求めるしかなく、想定以上の金銭的支出を招いた。中央が管轄しない調達への切替がさらなる懸念を呼び、追加的に外部から野菜を運び込まないと軍の需要を満たせないとして、極東地方の決定の再考を求めたのである［ГАРФ, 5446/13a/419/9 и об.］。これに対して調達委員会議長代理チェルノーフは 8 月 20 日、コルホーズや個人農は契約に基づく野菜の供出から解放されたと理解しており、すでに別の方策の実施は困難だ、調達委員会は政府が定めた以上の野菜を極東に運び込むことはないので、極東地方は自ら村々で広範な調達活動を展開し、軍と地域住民への野菜供給を確保すべきだと主張した［ГАРФ, 5446/13a/419/7 и об.］。9 月 13 日に供給人民委員部缶詰・果物野菜産業総局長代理は、ソユーズプロドオーヴォシチ（Союзплодоовощ 果実・野菜の連邦調達機関）のリソースの状況からいかなる野菜、ジャガイモも極東には分けられない、他の地域から極東地方への野菜輸送は不可能だ、と労働国防会議に報告した［ГАРФ, 5446/13a/419/4］。そして 9 月 27 日、労働国防会議は次の布告 No.1220/365c を採択した。

①極東地方執行委員会は極東地方内で調達したジャガイモ、野菜から特別赤旗極東軍に次の量を供与すること：ジャガイモ 9500 t、新鮮キャベツ 1000 t、発酵野菜 6500 t、テンサイ 2200 t、ニンジン 1800 t、玉ねぎ 900 t、キュウリとトマト 900 t 計 2 万 2800 t。②調達委員会は、極東地方への輸送プランを特別赤旗極東軍への輸送に限定して次の量を増やすこと：西シベリアからジャガイモ 1 万 3000 t、西シベリアから新鮮野菜 1000 t、中流ヴォルガから発酵野菜 500 t、西シベリアからテンサイ 300 t、西シベリアから玉ねぎ 400 t、バシキリアから玉ねぎ 500 t、③西シベリア地方ソヴィエト執行委員会はグリャディンスキー（注 44）、中流ヴォルガ地方ソヴィエト執行委員会はポルビーツィン〔Полбицин, Георгий Трофимович、1894-1937（注 45）〕、バシキール自治ソヴィエト社会主義共和国人民委員会議は同議長ブラシェフ〔Булашев, Зинатулла Гизатович、1894-1938（注 46）〕の各々個人的責任のもと、上記の量の貨物の特別赤旗極東軍への積み込みを遅くとも 10 月 15 日までに実行すること、④ソ連供給人民委員部は乾燥野菜の分配計画を策定する際には、1000 t の乾燥野菜を特別赤旗極東軍のために輸送することを見越しておくこと［ГАРФ, 5446/13a/419/1］。

中央の命令を理解していなかった極東地方の自助努力をもちろん促してはいるが、西シベリアばかりかそれよりも西の中流ヴォルガ地方、バシキリアからさえ極東軍への野菜輸送を決めていることは注目すべきである。問題提起した軍の要請に迅速に対応するよう一ヶ月余りで各地方に指示しており、極東軍兵士の健康維持に対する中央の配慮の高さを示すものだろう。もちろんこの時期、飢えに苦しむ農民たちとの強烈なコントラストを想起せざるを得ない。

次はジャガイモをめぐる問題である。1933年3月8日、東シベリア地方党委第二書記コズロフ（Козлов, Иван Иванович、1883-1970（注47））、同地方執行委員会議長ブカートゥイ（Букатый, Василий Людвигович、1890-1971（注48））がイルクーツクからモロトフに、次のように請願した。

> 当地方は2000 tのジャガイモの種芋を4月に極東地方へ運び出せとの人民委員会議調達委員会の命令（チェルノーフが署名）撤回を同委員会に請願したが拒否された。当地方は中央が指示したジャガイモの調達プランを107％実行し、調達物はすべて軍、基本的建設への供給に利用された。本地方の新収穫までのジャガイモ需要は食料が1万6500 t、種芋が1万2500 t計2万9000 tだが、これらは中央の管轄外の調達でカバーする予定だ（東シベリア地方で2万1200 t、西シベリア地方で7800 t）。この他に地方で組織されたコルホーズ師団、一連の大規模な新建設にジャガイモの種芋を提供する必要がある。ジャガイモ不足のため西シベリアでの調達まで迫られた。以上のことから極東地方の特別コルホーズ軍団への2000 tのジャガイモ積み出し命令を撤回してほしい［ГАРФ, 5446/27/30/120］。

これについて調達委員会議長代理チェルノーフは3月13日、ソ連人民委員会議議長代理クイブィシェフに、次のように訴えた。

> ジャガイモ調達の中央管轄のプランは、東シベリアで超過遂行された。電報にもある通り彼らは地方内部でさらに2万1200 tのジャガイモを調達するつもりで、地域内の追加的なジャガイモ資源の存在を認めている。よってジャガイモ供給が極めて困難な状況にあり、特別コルホーズ軍団への種芋提供が第一の課題である極東地方へ2000 tの放出を求める我々の要請を無条件に遂行するよう彼らの撤回要請を拒否してほしい［ГАРФ, 5446/27/30/121］。

同日クイブィシェフはコズロフ、ブカートゥイに「極東地方の特別コルホーズ軍団に必要なジャガイモの種芋を保証するのは最重要の課題だ。2000 tのジャガイモの種芋の積み出し命令を無条件に遂行してほしい」［ГАРФ, 5446/27/30/123］と述べ、チェルノーフ案の実行を東シベリア地方当局に促した。これに対してコズロフ、ブカートゥイは1933年3月17日、今度はスターリン、モロトフに要請した。

> 調達委員会は我々に、極東地方へ2000 tのジャガイモの種芋を特別コルホーズ軍団の供給

のために搬出するよう提案した。この命令を撤回してほしいと要請したが調達委員会はそれを却下した。人民委員会議にも同様に請願したが、クイブィシェフは出荷命令を容赦なく遂行せよと促すだけであった。第一に調達されたジャガイモはすべて利用しており、第二にジャガイモ不足で当地方は西シベリアでの調達を余儀なくされ、さもなければ種芋の需要 1 万 2500 t も満たせない。さらに当地方のコルホーズ師団、一連の大規模な新建設、洪水で被災した東部地域にも種芋を供給する必要がある。以上、ジャガイモの種芋 2000 t の出荷をできる状況にはまったくないので、命令撤回を懇願する［ГАРФ, 5446/27/30/110］。

この要請もスターリンらの認めるところとはならなかった。3 月 19 日に政治局は、①東シベリア地方党委、執行委員会の要請を却下し、②東シベリア地方党委、同ソヴィエト執行委員会はこの 2000 t を至急、無条件に搬出するよう命じたのである［РГАСПИ, 17/3/918/22］（注 49）。ソ連木材産業人民委員ロボフ（ソ連供給人民委員代理から 1932 年 1 月 5 日にこのポストに転任（～1936 年 10 月 1 日））もこの問題について 1933 年 3 月 23 日、クイブィシェフに次のように述べた。

東シベリア地方への全権チェルヌィシェフ Чернышев から、480 t のジャガイモの種芋を極東へ積み出せとの命令が出たと聞いた。これは木材調達企業と木材産業人民委員部の諸工場における将来の播種用である。木材人民委員部はエン麦の種子の供給を受けただけで、他を奪われると不十分になる。480 t を供出すれば東シベリア地方の木材調達企業に関する農業政策の実行を破壊し、来秋にはシベリアにある中央管轄のフォンドからジャガイモを輸送せねばならない。チェルヌィシェフには断固として拒否するよう伝えた［ГАРФ, 5446/27/30/157］。

これに理解を示したクイブィシェフは東シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長ブカートゥイに「木材調達企業と木材産業人民委員部の諸工場の播種のためのジャガイモを、極東地方への搬出のために放出するには及ばない。自分たちで調達し極東地方へ搬出されたし」と打電した［ГАРФ, 5446/27/30/158］。これに対してブカートゥイは 4 月 7 日、クイブィシェフに、次のように述べた。

我々のところにはないので極東地方へのジャガイモ搬出命令を撤回するよう 3 度要請した。上部機関による極東地方への搬出命令は、協同組合か他の組織に保管されている種芋を使ってはじめて実現可能だが、そうなると我々の地方でジャガイモの播種ができなくなる。これらの組織から取り上げられた分を補填すべく調達を展開した。他の組織が抗議する場合、拒否するよう要請する。木材産業人民委員部であってもだ」［ГАРФ, 5446/27/30/160］。

これに対し 4 月 10 日、クイブィシェフはブガートゥイに「極東地方への搬出のためのジャガ

イモについては、木材産業人民委員部の備蓄を借用するという例外措置として同意する。播種の開始までに補填してください」と返信した［ГАРФ, 5446/27/30/169］。

極東は極東で窮状を訴えていた。1933年3月18日、ハバロフスクの極東地方党委第二書記グリチマノフ（Гричманов, Алексей Петрович、1896-1939（注50））、バルマトゥノフ（Барматунов、極東地方執行委員会議長代理、詳しい経歴は不明）はモロトフ、カーメネフに打電した。

> 極東地方におけるジャガイモと野菜の調達は軍の維持には不十分だ（ジャガイモ5013 tは53％、野菜1392 tは9％）。播種キャンペーンとの関係で、調達されるジャガイモすべては種子フォンドに転用することを余儀なくされている。軍への野菜供給のために、本地方はキャベツの漬物700 tを供与可能だ。軍の残りのジャガイモ、野菜の需要をカバーしてほしい。昨年保存された乾燥野菜273 tを備蓄委員会から放出し、乾燥野菜447 tとキャベツの漬物300 tを輸送し、不足する残りのジャガイモ、野菜は極東地方が追加的に600 tの商用米、マカロニ加工のための小麦粉200 tを放出することで代替することを許して欲しい［ГАРФ, 5446/27/30/188］。

このグリチマノフらの要請について3月21日、レベデフ（既述の通り、ケルジェンツェフのことだと思われる）はクイブィシェフに、次のように説明した。

> ソ連全体で乾燥野菜の動員フォンドは7150 tと定められている。3月1日現在乾燥野菜の動員フォンドは5332 tで、900 tを計画した極東地方では359 tである（ソ連全体で1818 t、極東地方で541 t計画に不足）。よって極東地方に動員フォンドの現存備蓄を解除して放出することは不可能だ。特別赤旗極東軍の現在の需要をまかなうため、我々はすでにソユーズプロドオーヴォシチとツェントルプロドオーヴォシチに、ソ連の欧州部から古い乾燥野菜330 tを運ぶよう命令した。それらは更新［освежение 古い在庫の処分と新鮮な物資での補充］分として我々が動員フォンドから放出した［ГАРФ, 5446/27/30/191］。

一方で同じ3月21日、チェルノーフはクイブィシェフに、次のように述べた。

> 3月10日のデータによれば、西シベリアは消費協同組合のラインで計画に定められた234 tのキャベツの漬物を特別赤旗極東軍に搬出しなかったと調達委員会が知らせてきている。そのうえ西シベリアは、計画以上に大量のキャベツの漬物（計画では8000 t、実際には20120 t）を作ったので西シベリアに66 tの追加的命令を出すのは合理的である［ГАРФ, 5446/27/30/187］。

それから2か月以上経過した5月31日、政治局は再び、次のように決定した。

①極東〔コルホーズ〕軍団のために今後はジャガイモ搬出を停止してほしいとの東シベリア地方党委の要請を却下する、②東シベリア地方党委には極東地方へのジャガイモの種芋を急いで搬出し、極東軍団がそれを播種のために利用できるようにすること、③極東地方のコルホーズ軍団のためのジャガイモの種芋を適時に搬出せよとの党中委とソ連人民委員会議による指示を、東シベリア地方党委が実行していないと指摘する［РГАСПИ, 17/3/923/28］。

1932 年夏から一年足らずの間、東シベリア地方と極東地方におけるジャガイモと野菜供給の実態、双方の間で行われたやり取りと中央による介入の具体例を示した。2000 t の種芋の搬出の実行に関する全容が判明したわけではないが、以上のやり取りからも、東シベリアは中央に何度も命令の撤回を求めていたこと、政治局が定例会議の議題に載せるほど重視していたこと、そして最終的に極東を重視し、極東地方への野菜やジャガイモの輸送を他の地域に命じていたことが明らかになったであろう。

4. 備蓄委員会の活動、極東との関係

備蓄からの放出が問題になった事例をすでにいくつか紹介してきたが、備蓄委員会 Комитет резервов は満洲事変後に設立された。備蓄される品目は様々だったが、ここでは食料の備蓄と極東との関連に絞って簡単にまとめておきたい。食料については 1931 年 10 月 10 日の政治局会議で、「穀物の非常用 неприкосновенный フォンドと穀物飼料の動員 мобилизационный フォンド（1 億 5000 万プード＝ 245 万 7000 t）を労働国防会議の国家フォンド」とすることが委員会設置当初に決まり、翌 1932 年 5 月 4 日にはすべての食料、穀物飼料等を 8 月 1 日までに備蓄委員会の管轄に移すことが決められ、各地の食料不足を反映し、たびたび備蓄解除も行われた［寺山 1998a］。そして同年 7 月 16 日に政治局は「1932-33 年における穀類と飼料の国家フォンドと非常用フォンドの形成について」検討し、次のように決定した。

①国家フォンドの規模を 5500 万プード〔90 万 900 t〕（内訳はライ麦、小麦、穀粉 1800 万、ヒキワリ 550 万、エン麦 3150 万）、②非常用フォンドの規模を 1 億 2000 万プード〔196 万 5600 t〕（内訳は小麦 5000 万、ライ麦 5000 万、ヒキワリとヒキワリ作物 600 万、エン麦 500 万、大麦 500 万、トウモロコシ 300 万、ソラマメ 100 万）、③飼料の非常用フォンド、国家フォンドの規模を 50 万 t〔3052.5 万プード〕とし、陸海軍人民委員部自身の備蓄から軍への干し草の全般的供給を増やす［РГАСПИ, 17/162/13/30］。

上述した①の国家フォンドが 1931 年 10 月決定の動員フォンド、すなわちより柔軟な運用を想定したフォンドを指すものと思われる。②の非常用フォンドは容易に出し入れを認めない備蓄を意味し、③は当然家畜用である。さらに 1 か月後の 8 月 16 日に政治局は「1932 年の収穫から穀

類と飼料の国家フォンド、非常用フォンドを形成する時期」を検討し、クイブィシェフが提出した労働国防会議の布告草案を承認した（注51）。この間、政治局は1932年7月28日、次のように決定した。

①食料穀物のあらゆるフォンド、食料とその加工、穀類と飼料を備蓄委員会の管轄に移すことについての5月4日の政治局決定の施行期間を1932年9月1日まで延長すること、②新しく収穫される穀物と穀物飼料のすべての調達物は、1931年収穫の穀物や飼料の現存の備蓄と同様の形で、備蓄委員会の管轄下に入る［РГАСПИ, 17/3/894/7］〔翌7月29日労働国防会議は同じ内容の布告を採択［ГАРФ, 5674/9/23/85］〕。

備蓄委員会への移管が1ヵ月延期された。1932年8月8日、労働国防会議は特別備蓄の配置に関する問題を検討するため、ウンシュリフトを議長にエゴーロフ（Егоров, Александр Ильич、1883-1939、労農赤軍参謀部長）、マルティノヴィチ（注52）（重工業人民委員部）、ニコライ・クイブィシェフ（Куйбышев, Николай Владимирович、1893-1938、労農監督人民委員部（注53））、ジブラク（Зибрак, Эмиль Александрович、1902-1937（注54））（備蓄委員会）からなる小委を結成、10日以内に自身の決定を労働国防会議に提出して承認を受けるよう命じた［ГАРФ, 5674/9/23/109、ГАРФ, 5446/14a/295/2（注55）］。備蓄委員会の地方組織の整備も進められた。1932年8月26日、労働国防会議は布告No.1043/311c「備蓄委員会の地方の機構の定員制定について」を採択し、「1932年8月1日より、備蓄委員会の地方機構の定員、すなわちオゲペウの全権代表部備蓄監督 инспекция を1000人とする。備蓄委員会には地方定員を、備蓄委員会の未利用金から、しかるべき資金をオゲペウ予算に振替えることによって維持することを許可する」［ГАРФ, 5674/9/23/139］と決めた。上述したウンシュリフト小委に備蓄委員会を代表して参加したジブラクが1926年からオゲペウの経済局に勤務していたことからわかる通り、備蓄委員会は秘密警察たるオゲペウの強い指導のもとで備蓄の管理に当っていたことを示しているように思われる。そして1932年8月28日労働国防会議は、1932年収穫からの穀物飼料の非常用フォンドの地区ごとの配置計画を承認した。【表4】の通りである［ГАРФ, 5674/9/23/154］。

1932年の収穫からライ麦と小麦で164万t（穀粒換算）、豆類を含めるとソ連全土で約197万t、すなわち1億2027万プードの非常用フォンド形成を計画していたことになるが、これは当然7月16日の政治局決定と符合する。これに続いて9月1日、政治局は「穀物とその加工食品の保管方法について」、次の通り決定した。

①1933年7月1日までのすべての農業年の間、1932年5月4日付の政治局決定で定められた穀物及びその加工製品の保管手続きは従来通り、すなわち備蓄委員会の管轄下に置いたままとする、②穀物と飼料の発見、登録に関する政治局の課題をオゲペウと備蓄委員会の諸機関が成功裏に実行していることを指摘する。5月から8月にかけての期間、オゲペウの正

表４　1932 年収穫からの穀物飼料の非常用フォンドの配置（単位は穀粒換算で 1000 t）

	地区	ライ麦	ライ麦粉	穀粒換算による	小麦	小麦粉	穀粒換算による	ライ麦と小麦合計	エン麦	大麦	トウモロコシ	ソラマメ	キビ	そば	エンドウ	ヒラマメ	インゲンマメ	豆全部の合計	合計
1	北部地方	−	28	28	−	2	2	30	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	30
2	カレリア	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
3	レニングラード州	70	10	80	−	70	70	150	5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	155
4	西部州	−	9	9	−	1	1	10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	10
5	モスクワ州	50	60	110	30	60	90	200	12	−	−	−	−	−	−	−	−	−	212
6	イワノヴォ工業州	45	17	62	25	8	33	95	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	95
7	ニジェゴロド地方	30	17	47	45	8	53	100	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	100
8	ウラル	40	30	70	55	25	80	150	11	15	−	−	−	−	−	−	−	−	176
9	バシキリア	−	3	3	−	1	1	4	5	−	−	−	−	3	−	−	−	−	12
10	タターリア	−	3	3	−	1	1	4	−	−	−	−	−	2	5	−	−	5	11
11	中流ヴォルガ	24	13	37	41	12	53	90	10	−	−	−	10	−	3	2	−	5	115
12	中央黒土州	60	20	80	20	5	25	105	10	11	−	11.4	10	5	8	3	−	11	163
13	下流ヴォルガ	24	19	43	29	6	35	78	−	6	−	−	−	−	1	3	−	4	88
14	北カフカース	−	9	9	66	20	86	95	−	13	27	−	3	−	−	−	0/5	0.5	139
15	クリミア	−	−	−	−	4	4	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
16	カザフスタン	−	−	−	−	10	10	10	1	1	−	−	6	−	−	−	−	−	18
17	西シベリア	15	15	30	56	10	66	96	6	−	−	−	2	−	−	−	−	−	104
18	東シベリア	10	25	35	10	9	19	54	7	5	−	−	−	−	−	−	−	−	66
19	極東地方	5	5	10	5	5	10	20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	20
	ロシア共和国	373	283	656	382	257	639	1295	67	51	27	11.4	31	10	17	8	0.5	25.5	1518
20	ウクライナ	119	45	164	56	30	86	250	15	31	22	5	15	6.4	7	1	2.5	10.5	355
21	ベラルーシ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
22	ザカフカース	−	−	−	30	15	45	45	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	45
23	中央アジア	−	−	−	24	26	50	50	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	50
	ソ連	492	328	820	492	328	820	1640	82	82	49	16.4	46	16.4	24	9	3	36	1968

確で緊張に満ちた活動の結果、穀物の消費において計画通りの規律性、節約が達成されたことを確認する。オゲペウと備蓄委員会にはそれぞれ成果を挙げた職員を個別に表彰するよう委任する［РГАСПИ, 17/3/898/3］。

当時ソ連全土で飢饉が猖獗を極めていたことを考えると、備蓄が飢饉に及ぼした影響、餓死者を横目に備蓄を「成功裏」に実行していたのかどうかついての検討が必要だろう。ちなみに【表 4】にある通りウクライナは穀物と豆類合わせて 35.5 万 t、全国の 18％を占めており、ウクライナが主張する「ホロドモール」については、そもそもこの数値の高低や実際の備蓄の構築や解除、食料支援等、詳しい考察は現在未公開の備蓄委員会の公文書公開を待つ必要がある。

極東地方について政治局は 1932 年 9 月 17 日、「①現在の供給および極北への供給を確保すべく、備蓄委員会には極東地方に 1 万 5000 t の穀物を非常用フォンドから放出することを許可、②非常用フォンドへの 1 万 5000 t の補填は極東地方へ運ばれる最初の穀粒で行う」［РГАСП,

17/162/13/113］と決定、10月10日には「外国貿易人民委員部は人民委員会議の予備基金から4万ルーブル（外貨）を支出してサハリンのために至急野菜を購入する」との労働国防会議の布告を承認［РГАСПИ, 17/162/13/128］するなど支援していた。東シベリア地方についても1932年11月2日、①600万プード穀物調達量を減らすとのレオーノフ（東シベリア地方党委書記）の提案は過大すぎる、②東シベリア地方の穀物調達量を400万プード削減する、③労働国防会議調達委員会は削減する400万プードのセクター、作物ごとの数量を確定すること、④東シベリア地方党委は100％の穀物調達の最終的プランを必ず実行すること［РГАСПИ, 17/162/14/2］と決定してこの地方の窮状に理解を示す一方で、1932年10月11日には、極東地方による第4四半期の穀物供給増加要請を却下した（西部州、カレリアと並んで）［РГАСПИ, 17/3/903/10］。

5. 特別国防フォンド創設の過程

5.1. 特別国防フォンド創設までの過程

全国的な備蓄構築とその配置については第4節で見たとおりだが、本節では極東及び東シベリア地方における特別国防フォンド創設の過程についてまとめることにしたい。1933年2月21日政治局は、「極東地方における穀物調達について」次のように決定した。

> ①極東地方における穀物調達の年間計画を120万プード〔19656 t〕引き下げ、この量の穀物を極東地方に輸送する年間計画も削減するとのベルガヴィノフの提案を採択し、②昨年貸し付けた種子のうち利用されなかった残余を、ソフホーズによる穀物の年間調達計画の実施分として参入した極東地方組織の不正行為に関する問題を検討するよう中央統制委員会に委任する［РГАСПИ, 17/3/916/24］。

極東地方で120万プードを農民から調達した上で、さらに120万プードを他の地域から極東地方へ運びこんで240万プードを当局が手にする代わりに、調達も他所からの搬入も停止することを①は意味している。調達や輸送にかかる手間と外部からの120万プードの穀物の喪失を天秤にかけ、120万プードがなくても大丈夫だとベルガヴィノフが判断したのだろうか。一方で②のような不正が暴かれた結果だと思われるが3月7日、政治局は「お粗末な仕事」を理由にベルガヴィノフを解任した［寺山2000a：76］。さらに政治局は1933年2月23日、穀物や塩を極東に輸送することを決めた。塩については既述の通りだが、穀物は以下の通り合計3万3000 tを3月から4月に輸送することを計画した。

> ソ連の蒸気船で穀物を、3月に「ティフリス」で8500 t、「アンガルストロイ」で6500 t、「エリータ」で2500 t、4月に「タシケント」で6500 t、「ハリコフ」で8000 t、極東の港での活動のために派遣される蒸気船で1000 tを輸送する。「ティフリス」「アンガルストロイ」は3

月の第 3 旬間、「タシケント」は 4 月第 1 旬間、「ハリコフ」「エリータ」は 4 月第 3 旬間に輸送する。蒸気船による穀物輸送に 12 万 5000 ルーブルを外貨で支出し、それ以外に蒸気船団のために「トルグシン」の 3 万 3000 ルーブル分の商品を放出する。港への穀物の適時の送付の責任をチェルノーフに、積み込みと極東への送付の責任をローゼンターリ（水運人民委員部）に負わせる［РГАСПИ, 17/162/14/66.］［寺山 2000a：75］。

これに合わせて 4 月 1 日、労働国防会議は、備蓄委員会のフォンドから 6 万個の袋を、極東地方内で種子の輸送に使うべく放出することを極東地方党委に許可し、軽工業人民委員部には 1933 年第 2 四半期に同じ量を備蓄に戻すように指示した［ГАРФ, 5674/9/26/2］。一方で 1933 年 3 月 27 日、労働国防会議は「1933 年の追加的な食料の動員フォンド形成」ついて」、同年 1 月 5 日のソ連人民委員会議の布告 No.22 に追加して次のように決定した。

①供給人民委員部のフォンドごとに、1933 年に連邦予算に関して備蓄委員会に付与された 1567 万ルーブル（オゲペウへの 100 万ルーブルも含む）を以下の通り配分：a）労農赤軍のための動員課題を遂行するため原料、燃料、物資、工業企業の半製品に 400 万ルーブル、b）労農赤軍とオゲペウ軍のための動員フォンド形成に：ニス 500 t（27 万ルーブル）、植物性油 2000 t（95.8 万ルーブル）、コンデンスミルク 20 万缶（18.2 万ルーブル）、ひまし油のための樽 2250 個（9 万ルーブル）、配合飼料 2 万 t（146 万ルーブル）。c）動員展開初期の労農赤軍の活動を保障する栄養食品の低下しない備蓄の構築：食肉 3000 t（330 万ルーブル）、動物性脂肪 250 t（57 万ルーブル）、バター 242 t（78.3 万ルーブル）、マカロニ 4200 t（163 万ルーブル）。d）サハリン、カムチャツカにおける動員フォンド構築とそれらの収容のための倉庫建設に 242.7 万ルーブル。②ソ連供給人民委員部は本布告の第 1 項目に定められた備蓄を 1933 年中に形成すること。③追加的動員フォンドと減少しない備蓄の収容配置、それらを形成する時期を備蓄委員会は陸海軍事人民委員部、オゲペウ、ソ連供給人民委員部との合意の上で制定すること［ГАРФ, 5674/9/25/207-208］。

この中で極東地方に関するものは① -d のサハリン、カムチャツカにおける動員フォンド構築だろう。ところで 1933 年 5 月 1 日にソ連全土で穀物の残余の在庫確認を行ったチェルノーフ［1933 年 4 月に人民委員会議附属調達委員会議長に就任していた～ 1934 年 4 月］は新収穫までの穀物・飼料バランスの状況について 1933 年 6 月 4 日、スターリン、L. カガノーヴィチ（Каганович, Лазарь Моисеевич、1893-1991、政治局員、兄弟もいるためイニシャルで区別する）、モロトフ、クイブィシェフに次のように報告した。

特に西シベリアでは、穀物調達プランの大幅な未遂行のため、極東地方及びモンゴルへの搬出という最重要命令の遂行が、すでに現在困難に陥っている（5 月 25 日現在のデータに

よれば、西シベリアで計画の35％に過ぎない（計画では500万プード、実際は180万プードの調達））。この状況下、現行プラン以上に穀物250万プード〔4万950 t〕を追加的に極東地方へ輸送するという特別課題、それに中央委員会が12月9日に承認した計画以上に6月だけで550万プード〔9万90 t〕の穀物供給を求める軍からの要請遂行に我々は困難を抱えている［ГАРФ, 5446/27/33/130-129］（注56）。

この報告は極東地方が穀物供給を依存していた西シベリア地方が、前年同様困難な状況に置かれていたことを物語っている。1933年7月1日現在、ソ連全土で5940万プード（約97.3万t）の穀物が残存しているとの報告が7月16日にスターリンになされていたが（注57）、このころスターリンはソ連東方での備蓄構築を構想していた。それがわかるのは1933年7月26日、チェルノーフがスターリンに提出した報告である。

あなたの委任にしたがい、東方における7000万の特別国防フォンド創設問題に関する布告草案を添付する。フォンドの配置、倉庫の容量を示す添付の地図をご覧の通り、現在我々が東方でフォンド保管に利用している倉庫の容量は873万プードであり、700万プードの穀物飼料、穀粉の保管が可能である。その上イルクーツクとヴェルフネウーディンスクの二地点では、商用穀物と穀粉のための倉庫に空きがない。日常的な供給のために必要なこれらの地点にある穀物備蓄は、基本的に鉄道から消費者に直接届けねばならない。倉庫の大部分（8400万プードの容量）〔137万5920 t〕は1933年の残りと1934年初頭に建設せねばならない。その上、東方では製粉場所が不十分なため、ひき割り機と穀物乾燥機を備えた7つの製粉所を同時に建設せねばならない。調達委員会だけでできる仕事ではないので、建設を倉庫はグラーグ〔ГУЛАГ 矯正労働収容所総局〕、製粉所はフレボストロイ〔Хлебострой 製パン企業設計・建設・組立全ソ国営トラスト〕に委ね、後者を特別に支援するよう提案する。このフォンド形成のための穀物の搬送を9月15日には着手し、11月1日には現存の倉庫の700万プード分の搬送を完遂することを予定している。倉庫建設が終わり次第フォンドの輸送を行えるよう、フォンドの残り部分は調達地点、すなわち第一に東西シベリアで予約する。この課題遂行には、迅速な解決を要する多くの問題に直面しそうなので、総合的な指揮をとる人民委員会議附属の特別小委を結成するよう提案する［ГАРФ, 5446/ 27/33/144］。

保管する穀物の1.2倍程度の容量が倉庫に求められていたのだろう。この提案について8月11日、チェルノーフはスターリン、モロトフ、クイブィシェフに「あなた方の出したすべての指摘を考慮して作成した東シベリア地方、極東地方における特別フォンド形成についての中央委員会決定草案を添付する」［ГАРФ, 5446/27/33/148］として、布告草案「東シベリア地方、極東地方における食用穀物と穀物飼料の特別国防フォンド形成について」［ГАРФ, 5446/27/33/147-145］を提出、それが最終的に8月13日政治局によって採択された［РГАСПИ, 17/162/15/28-29（注58）］。7

月 26 日のチェルノーフによる布告草案（＊で示す）と比較しつつ、この 8 月 13 日の政治局決定を紹介することにする。言及がないところは当初案と同じことを意味する。

① 東シベリア地方と極東地方に総計 6000 万プード（＊ 7000 万プード）の穀物飼料の特別フォンドを形成する。フォンド形成地点への作物ごとの収容計画は、人民委員会議調達委員会〔以下たんに調達委員会〕が陸海軍事人民委員部及び供給人民委員部との合意の上、10 日以内に確定する【表 5】。

② 上述の量の穀物飼料は、党中央委員会及びソ連人民委員会議の許可を得たときのみ放出が許される特別国防フォンドとして、ザゴトゼルノと労働国防会議附属備蓄委員会が維持する。

③ 1933 年の計画に基づき動員フォンド収容を予定していた次の都市の倉庫をフォンド保管に利用する。総計 873 万プードである【表 6】。

④ フォンドの残り部分を収容するため、本決定第一項にある地点に 7000 万（＊ 8400 万）プードの容量を持つ、大部分は木造の新倉庫を建設する。製粉所に付設されるものを除き、倉庫建設はオゲペウ、ヤゴダ〔Ягода, Генрих Григорьевич、1891-1938〕に委ねる。第一段階 3000 万プード分が 1934 年 1 月 1 日まで（＊ 1933 年 12 月 1 日まで）、残り全部が 1934 年 4 月 1 日に終了するよう、倉庫建設にすぐに着手すること。調達委員会のチェルノーフは、倉庫建設でヤゴダを最大限支援すること。

⑤ 調達委員会は 1933 年 11 月 1 日までに、倉庫のある場所（第 3 項を参照）へ 800 万プード（＊ 700 万プード）の穀物、穀粉、飼料を運び込むこと。調達委員会は、特別フォン

表 5（単位 100 万プード）

フォンドの種類	8 月 13 日政治局決定	7 月 26 日草案
穀粒状態の穀物	18	22
穀粉（穀粒換算で）	7	10
ヒキワリ	6	3.5
エン麦と大麦	29	34.5
合計	60	70
形成地点ごと		
アチンスク	3	3
クラスノヤルスク	9	9
カンスク	3	3
イルクーツク	6	6
ヴェルフネウーディンスク	5	6
チタ	4	4
ボチカリョーヴォ	5	6
ハバロフスク・ヴャーツカヤ	9	12
コムソモリスク	4	6
ソフィースク	3	3
ニコラエフスク・ナ・アムーレ	2	3
ニコリスク・ウスリースク	4	6
ウラジオストック	3	3

表 6

保管場所	容量（1000 プード）
クラスノヤルスク	963
カンスク	1770
イルクーツク	1207
ボチカリョーヴォ	285
チタ	1770
ヴェルフネウーディンスク	830
ハバロフスク	458
ニコリスク・ウスリースク	226
ウラジオストック	1221
合計	8730

ドの残りの部分を1933年12月1日までに東西シベリア、カザフスタン、ウラルで、エン麦の一部はバシキリア、ゴーリキー地方で予約すること。これら予約したものの輸送は倉庫建設が終了し次第着手すること。

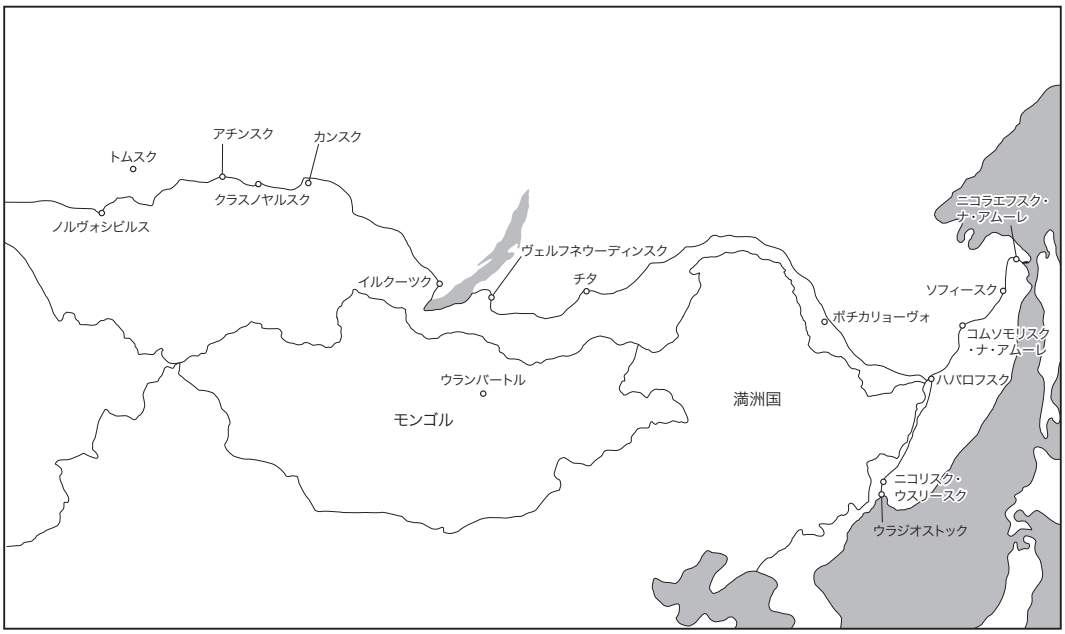
⑥　着工済みの製粉能力1日150 tのクラスノヤルスク製粉所、1日200 tのカンスク製粉所建設を1934年4月1日までに終了すること。さらに1日100 tの製粉所を3箇所、アチンスク、イルクーツク、ヴェルフネウーディンスクに、1日200 tの製粉所をチタ、ハバロフスク、ボチカリョーヴォに建設すること。新製粉所はすべて穀物乾燥機、ヒキワリ機、大型穀物倉庫、穀粉倉庫を備え付けること。製粉所と附属倉庫の建設は、ロバチョフ〔Лобачев, Иван Степанович、1879-1933（注59）〕、アヴラーモフ〔Аврамов, Роман Петков、1882-1938（注60）〕の個人的責任のもと、グラヴムカー〔Главмука 製粉・挽き割り産業総局〕とフレボストロイに負わせる。製粉所の建設と操業開始を1934年7月1日までに行う。倉庫と製粉所建設、労働者への供給、建設資材と設備の提供・輸送、資金提供と労働者募集は、最優先の軍事建設と同等に行う。ソ連人民委員会議は倉庫と製粉所建設に必要な建設資材、資金を順番度外視で9月1日までに割り当てること。重工業人民委員部は新製粉所のための設備、ヒキワリ機、乾燥機、大型穀物倉庫の6セットと、クラスノヤルスク、カンスクの製粉所に足りない設備を1934年1月1日より前に提供すること。

⑦　フォンド創設のため9月1日から4月1日まで、5000万プードの輸送を交通人民委員部が保証するとのポストニコフ〔Постников, Александр Михайлович、1886-1937、ソ連交通人民委員代理〕の発言を留意する。残りの1000万プードはウクライナと北カフカースから海路輸送する。交通人民委員部は必要な期限までに建設資材の輸送を保証すること。

⑧　本決定の遂行状況を恒常的に監視し、課題実現のために必要なすべてを確保するため、クイブィシェフ（議長）、ガマルニク、ヤゴダ、チェルノーフをメンバーとするソ連人民委員会議付属小委を設置する。小委は本決定の遂行状況を毎月（＊毎月ではなく1933年10月1日、11月1日、34年1月1日に）党中央委員会に報告すること（注61）。

この政治局決定には添付されていないが、7000万プードの保管を予定していた当初の布告草案から（【表7】）、各地の倉庫の詳しい内訳が判明する。

7月26日草案では7000万プード（穀粒穀物2200万、穀粉1000万、ヒキワリ350万、エン麦と大麦3450万）だった備蓄計画を6000万プードに削減したことがわかる。削減された1000万プードの内訳はヴェルフネウーディンスク100万、ボチカリョーヴォ100万、ハバロフスク300万、コムソモリスク・ナ・アムーレ200万、ニコラエフスク・ナ・アムーレ100万、ニコリスク・ウスリースク200万の6か所である。②にある通りこの備蓄は厳格に管理され、中央の許可なく勝手に備蓄を解除することは禁じられていた。③の倉庫に加え、6000万プードの穀物保管のため



地図 A

表 7　各地の倉庫で、保管が予定されていた作物ごとの量
（単位 1000 プード）[ГАРФ, 5446/27/33/141]

地点	保存物				合計	必要な倉庫の容量	在庫量	商用倉庫の容量	建設の必要な容量
	小麦とライムギ	穀粉	ヒキワリ	穀物飼料					
アチンスク	2.061,3	921,7	–	–	1983,0	3167,3	–	860,0	3.167,3
クラスノヤルスク	1.030,8	460,9	549,4	7081,6	9122,7	13573,7	963,3	81,7	12.610,4
カンスク	618,4	276,5	61,0	1465,2	2421,1	3367,7	1770,4	1215,0	1597,3
イルクーツク	1.649,0	737,4	305,2	3357,6	6049,2	8272,3	1206,9	–	7065,4
ヴェルフネウーディンスク	1.595,0	713,4	323,6	3418,7	6050,7	8309,3	830,3	–	7479,0
チタ	1.137,8	508,8	305,2	1831,4	3783,2	5044,8	1769,9	164,1	3274,9
ボチカリョーヴォ	2061,3	921,7	348,0	2704,4	6035,4	7912,0	285,2	42,8	7126,8
ハバロフスク	4.122,6	1843,4	573,9	5530,9	12070,8	15872,7	457,9	600,0	15414,8
ニコリスク・ウスリースク	2.061,3	921,7	286,9	2765,5	6035,4	7936,4	225,9	283,1	7710,5
ウラジオストック	1.030,8	460,9	140,4	1385,8	3017,9	3969,6	1221,0	–	2748,6
コムソモリスク・ナ・アムーレ	2.061,3	921,7	286,9	2765,5	6035,4	7936,4	–	–	7936,4
ソフィイスク	1.030,8	460,9	195,4	1330,8	3017,9	3947,6	–	–	3947,6
ニコラエフスク・ナ・アムーレ	907,0	405,6	122,1	1282,0	2716,7	3591,4	–	–	3591,4
合計	21.367,4	9554,6	3498,0	34919,4	69339,4	92901,2	8730,8	3246,7	84170,4

に新たに7000万プードの容量をもつ倉庫建設も決めた④。しかも東西シベリアにとどまらず⑤の通りカザフスタン、ウラル、さらには沿ヴォルガ地方からの穀物輸送を予定していた。⑥にある通り、製粉所は建設中のものを含めて8か所となる。倉庫に近い場所での建設を予定していた。満洲国と対峙する極東及び東シベリアだけでなく、クラスノヤルスク周辺（カンスク、アチンスク）での倉庫、製粉所は戦時の後背地の役割を担うものだったといえるだろう。穀物輸送には鉄道だけでなく、6分の1は船舶の利用も想定していた⑦。ナウーモフによれば、クラスノヤルスクで88、イルクーツクで46の倉庫建設が求められ、オゲペウ議長代理のヤゴダからその建設を指示された東シベリア地方オゲペウ全権代表ジルニス（注62）は基本的に囚人や行政流刑者、富農絶滅策で追放された特殊流刑囚 спецпереселенцы から人員を集め、作業監督管区を設置した［Наумов 2004：111］。

この政治局決定から二日後の8月15日、今度は労働国防会議が布告No.703-168cc「極東地方と東シベリア地方における追加的な動員フォンドの構築について」を採択した。

> ①極東地方と東シベリア地方で労農赤軍に供給するため、ソ連供給人民委員部は1933年10月1日までに魚2415 t、肉缶詰145万缶、動物性油脂1434 t、塩245 t、肉3527 t、植物油800 t、砂糖545 t、洗濯石鹸300 tからなる食料の追加的動員フォンドを形成すること。このほかに他の州の動員フォンドを削減して極東地方と東シベリア地方に乾燥野菜1296 t、洗濯石鹸196 tを輸送すること。②追加的な動員フォンド及び乾燥野菜と洗濯石鹸の輸送費1582万1065ルーブルの支払いは、工業製品の備蓄フォンド形成のための備蓄委員会への資金でまかなう［ГАРФ, 5674/9/27/1、РГАЭ, 8043/11/67/6.］。

ここでも他の地域の備蓄削減による、極東及び東シベリア地方の備蓄強化は注目すべきである。続いて8月29日に政治局は、「東シベリアと極東の穀物倉庫、製粉所建設への資材供給に関する方策を検討するため、クイブィシェフ（議長）、ヤゴダ、チェルノーフ、オルジョニキッゼ、ロボフ、ポストニコフからなる小委を結成する。作業期間は5日」と決定した［РГАСПИ, 17/3/929/6］。

5.2. 特別国防フォンド創設決定後の諸問題と初期の対応――1933年末まで

最後に、特別国防フォンド創設決定後に生じた諸問題に触れることで本稿を閉じることにしたい。1933年9月10日、東シベリア地方及び極東地方における穀物倉庫及び製粉所建設問題について上記クイブィシェフ小委が開かれた。その議事録によれば委員長はクイブィシェフで、参加者は小委メンバーのヤゴダ、トゥハチェフスキー（Тухачевский, Михаил Николаевич、1893-1937、陸海軍事人民委員代理）、M. カガノーヴィチ（Каганович, Михаил Моисеевич、1888-1941、政治局員ラーザリの兄ミハイル、重工業人民委員代理）、チェルノーフ、ポストニコフで、招待されたのがトロヤノフスキー（Трояновский, Александр Антонович、1882-1955（注63））、エゴー

ロフ、ジブラク、ラゾフスキー、ゾロタレフ、アヴラーモフ、コティクである。すべての人物を特定できていないが、エゴーロフは後にソ連内務人民委員部特別建設（穀物施設群建設）局長（1937 年 10 月 29 日−1938 年 6 月）を務めることになる人物（注 64）だと思われる。8 月 13 日の政治局決定⑧と、8 月 29 日決定の小委、それに 9 月 10 日開催の小委の構成に変化があるが、食料問題の検討に軍（ガマルニクからトゥハチェフスキーへ）から重要人物が参加していたことは、この事業の軍事的側面の強さを裏付けるだろう。会議の詳しい中身は不明だが、次のように決定した。

①トロヤノフスキー（委員長）、ジブラク、ゾロタレフ、アヴラーモフからなる小委は、A）ここでの意見交換を基礎に一日かけて、穀物倉庫と製粉コンビナートに関する布告草案二つから、提供期限を明示しつつ、疑う余地のないものすべてを選び、B）3 日以内に不足している設備（電気設備、エンジン、ケーブル、ボイラー等）の獲得を数量、提供期間、拠出元も含めて検討し、C）提言を提出して本小委（クイビシェフ委員長）の承認を受けること。②同じ小委（トロヤノフスキー委員長）にポストニコフを加え、東シベリア地方と極東地方における穀物倉庫と製粉コンビナート建設に不可欠な建設資材と設備の輸送プランを、発送地・目的地を明示して 2 日以内に作成すること［ГАРФ, 5446/27/41/95］。

一方で 9 月 15 日チェルノーフは、スターリン、L. カガノーヴィチ、クイブィシェフに 1933 年 8 月 13 日の政治局決定の実行状況について報告した。概要は以下の通りである。

①作物ごとの割当計画策定は実行済みである。② 800 万プードの穀物、穀粉、飼料の搬送に関しては、9 月には現行の供給が可能な数量の貨車だけを受け取った。極東地方については 10 月になっても同様で、フォンド形成まで含む必要数（ウスリー鉄道で 1 万 8000 貨車、ザバイカル鉄道で 1 万 500 貨車）ではなく、両鉄道では各々 3000 貨車だけ与えられる予定である。9 月 10 日現在、布告に示された配備諸地点に 350 万プードが集中している。③製粉所建設のために建設所長が任命され、彼らは 73 人の技師・技術者グループと 8 月 28 日から 9 月 11 日にかけて建設地へ出発した。200 t の製粉所長にはすべての施工図を添えた設計案が提供されたが、100 t の製粉所長には施工図なしに技術的原案のみ渡された。その施工図はフレボストロイが考案中で、10 月 10 日までには準備ができる。東方での製粉所の特殊条件（永久凍土）を考慮し、現地へ探索隊 6 班が派遣され、ソ連欧州部で募集された労働者 430 人が派遣された。労働者の募集はきわめて不調である。木材、ガラス、釘等の建設資材は 9 月 4 日、残りの建設資材（セメント、鉄、梁等）や設備は 9 月 13 日に人民委員会議が手配した。発電設備、電気設備の提供や自動車輸送の問題も未解決だが、それなしには仕事を遂行できない。8 つの製粉コンビナートにはトラック 72 台と軽自動車 8 台が必要だ。発電設備、電気設備の問題は人民委員会議が 3-4 日後に検討予定である。イルクーツク、ヴェルフネウーディンスク、チタ、アチンスクで建設用地が決まったがボチカリョーヴォ、ハバ

ロフスクでは未定である［ГАРФ, 5446/27/41/111-110］。

この報告を受けたものと思われるが9月15日、政治局は「穀物輸送と倉庫組織に関する1933年8月13日決定の遂行を成功させるための方策を検討すべくミコヤン、チェルノーフ、ポストニコフ、ヤゴダからなる小委」を結成した［РГАСПИ, 17/3/930/5］。次から次に小委が結成されていた印象を受ける。そして9月19日、政治局は「南部の諸港から極東地方へ1000万プード［16万3800 t］の穀物を適時に輸送するため」、次のように決定した。

①ザゴトゼルノと外国貿易人民委員部は10月に10万t、11月に6万5000 tの穀物を輸送すべく、それぞれ9月と10月に外国船をチャーターし、船への積み込み、積み下ろしに向けて対策を練るよう、水運人民委員部に用船計画を知らせる。②ザゴトゼルノは遅くとも9月20日までに第①項の数量の用船をソヴフラフトСовфрахт〔外国船チャーター全ソ合同、1929年に外国貿易人民委員部に設立〕に命じ、熱帯輸送という条件に適した湿度の穀物を港へ適時に運び込むこと。③外貨小委は用船に90万ルーブルを支出すること。④外国貿易人民委員部と水運人民委員部は、特殊貨物を積んだソ連船4隻を極東に送る問題を9月25日までに明確にし、それに応じてチャーターの規模も明らかにすること。⑤水運人民委員部はウラジオストックへの船団来航に埠頭、機械装置、倉庫、引込線を準備し、港に必要な数の労働者を集め、船団の無駄な作業停止を許さないこと。⑥船からの荷下ろしの際、交通人民委員部はウスリー鉄道の埠頭と荷下ろし用の労働力をウラジオストック港の管轄に渡すこと。⑦水運人民委員部は蒸気船団の水先案内に必要な数の砕氷船を港に確保すること［РГАСПИ, 17/162/15/80］。

④の特殊貨物とは軍需物資に関連したものと想定され、機密漏洩を危惧し外国船ではなくソ連船を使ったものと思われる。ともかく6000万プードの特別フォンドの六分の一となる1000万プードを船舶によって黒海から輸送する計画はこのようにして進められた。さらに9月23日政治局は、党中委とソ連人民委員会議が定めた期限内に極東地方に穀粒と穀粉の特別フォンドを創設するため、として次のように決定した。

① 交通人民委員部は地域内の穀物移動を換算せず、いかなる貨物をも差し置いて10月19日まで〔毎日〕ウスリー鉄道あてに穀物100貨車、ザバイカル鉄道あてに穀物150貨車、10月20日以降はウスリー鉄道あてに150貨車、ザバイカル鉄道あてに100貨車を輸送すること。フォンド形成のため11月、ウスリー鉄道に6000貨車（一日200貨車）、それ以外にザバイカル鉄道に毎日150貨車ずつ渡すこと。1933年11月から1934年4月にかけてウスリー鉄道あてに毎月600万プードの穀粒と穀粉を運ぶこと。

② アムール川沿いの地点で腐敗の危険性を冒さずに上述の量の穀粒と穀粉は貯蔵できな

いので、製粉所に関する中央委員会決定に加え、コムソモリスクに 1934 年秋の完成を目指し製粉能力 100 t の製粉所、ニコラエフスク・ナ・アムーレとソフィースカヤに 1934 年 8 月 1 日操業開始の予定で各々製粉能力 40 t の粗びき製粉所の建設に至急着手すること。これらの製粉所建設はオゲペウに委ね、チェルノーフは不可欠な設備をすべて提供すること。

③　アムール川沿いの製粉所建設との関連で、これら 3 地点での備蓄穀物の 70％は穀粒で、30％は穀粉で運び込むこと［РГАСПИ, 17/162/15/83］。

①のウスリー鉄道［シベリア鉄道の最東端区間］あて 3600 万プード（6 か月 × 600 万プード）はボチカリョーヴォ以東の 7 か所の倉庫（地図 A を参照のこと）に収容されることになるのだろうが、表 5 からもわかる通り、この 7 か所の倉庫には合計 3000 万プードの穀物保管が予定されていたため、超過する部分は現地での消費に回されていた可能性もある。この 9 月 23 日の政治局決定は製粉所建設をオゲペウ、すなわち囚人労働に委ねていたが、続く 10 月 2 日に政治局は、「ガマルニクとラヴレンティエフの電報（ハバロフスクとボチカリョーヴォの製粉コンビナートについて）」と題して、その建設をオゲペウの全権代表に委ねるとの提案を却下すると決定している［РГАСПИ, 17/3/932/8］。理由は不明だが、上述したコムソモリスク、ニコラエフスク・ナ・アムーレ、ソフィースカヤの製粉所は国境から遠いが、ハバロフスク、ボチカリョーヴォは国境に近いという地理的条件が重視された可能性がある。その後も政治局はクイブィシェフの代行問題（注 65）や、引き込み線の問題（注 66）を検討していたが、10 月 31 日には 8 月 13 日の政治局決定の遂行状況について、ソ連人民委員会議付属執行小委に委ねることを決めた［РГАСПИ, 17/3/933/33］。そして調達委員会議長チェルノーフが執行小委に報告した 11 月 1 日現在のフォンド創設状況の概要は以下の通りである。

不完全なデータだが、極東と東シベリアでのフォンド形成のため 8 万 9600 t（およそ 550 万プード）、そのうち東シベリアに 7 万 8000 t（10 万 7000 t を計画）、極東に 1 万 1600 t（3 万 5900 t を計画）を輸送した。現地で調達した穀物は 11 月 1 日までに、東シベリアと極東地方のフォンド形成地点に 4 万 6000 t（うち 3 万 4200 t は東シベリア、1 万 1800 t は極東地方）集中した。特別フォンド形成の命令は 8 月 23-26 日に出たが、最初の荷下ろしは 9 月末に始まった。9 月に 2 万 5859 貨車を必要としたが、移送委員会が割り当てたのは 5718 貨車だけで、実際に穀物を輸送したのは 40％以下の 2125 貨車だけだった。その上 9 月最後の 10 日間に貨車が集中し、9 月初めの 10 日間に貨車の提供はほぼなかった。9 月分も含め 10 月に 3 万 3322 貨車を要求したが、移送委員会のノルマは 6921 貨車、交通人民委員部による実際の輸送は 10 月に 3118 貨車にとどまった。10 月に当地方の最重要の消費者（金産業、軍部）の現在の供給のための積み込みもほぼ完全に停止した。よって 11 月には 2 万 4292 貨車を要求し（移送委員会は 1 万 58 貨車を承認）、フォンド形成用の貨車でも最重要の軍及び金産業へ

輸送する。これ以外に蒸気船も極東とシベリアに穀物を運んでいる。11月1日までにウラジオストックに外国船4隻（カステリムール、パリス・シティ、ヨーク・シティ、オリエント・シティ）、ソ連船1隻サモエードが到着し、計3万6842tの穀物を運んだが、現在蒸気船8隻に6万6450tを積み込み中である。一方でウクライナでの貨車の引き渡しが少ないため、最近積み込みに困難をきたした結果、乾燥機で湿度11-11.5％まで乾燥された穀物が、調達地点での長期間放置により、港への到着時に12-12.5％、場合によっては13％に湿度が上がる場合がある。湿度12.5％以上の穀物の積み込みも許可せざるを得ず、それ以上の湿度の穀物は港で追加的に乾燥させねばならない。今のところ東シベリアと極東地方に到着した穀物は多くないが、両地方ではこれらの穀物の受け入れに対処できず貨車からの荷下ろしに長時間を費やしている。この問題解決のため極東地方に60台の運搬装置、現地労働者支援のための労働者グループも派遣したが、現地組織が穀物の迅速な荷下ろしに不可欠な人員を動員することを願う。このほかに我々は倉庫建設完了までに、必要な場合は穀物を保管するための防水シートや袋も極東地方に輸送した［ГАРФ, 6760/3/57/14 и об.］。

以上が特別国防フォンド創設に向けた1933年秋までの状況である。

6. おわりに

本稿では1931年以降のソ連極東地方における食料事情を中心に考察を進めてきた。いうまでもなく広大なソ連の大地には主食たる穀物生産に向き、不向きな土地があり、生産量が足りない地域へ穀倉地帯から穀物を送る必要があった。本稿でも詳しく考察した通り、穀物供給を受け取る側だった極東地方では、国防事業の推進に伴う需要の突発的急拡大に緊急的に対応するため、穀倉地帯からのいつも以上の穀物輸送が必要となった。そもそも穀倉地帯から最も遠い極東地方への穀物輸送には莫大なコストと時間がかかるが、東西シベリアからの食料供給で足りなければ黒海からの穀物輸送も行い、それが非合理的だと判断すれば近隣諸国からの輸入という方策にも訴える必要があった。そしてこの当時の穀物の輸入先は、少なくともペルシャ（イラン）、中国、カナダ、オーストラリアであったことを本稿は明らかにした。しかも当時のソ連政府は予算の均衡に固執していたためか、同時に、同じ量の穀物を輸出することによってその輸入代金を捻出しようとしていたことに特徴がある。国債発行による将来へのつけ回しや、国際機関が保証する輸入代金の借入といった現代の世界が採用している危機回避策を当時のソ連は使うことができなかった。当時のソ連の国際貿易に関する詳細なデータは完全に公開されているわけではないとされ、この分野の史料の公開も必要だろう。ロシアにとって天然ガスや石油が外貨獲得の武器となる時代はまだ先で、穀物輸出を補完する外貨獲得の手段として当局が目を付けたのが金産業の拡大だった［寺山 1998a：186］。コリマが代表的だが、極北での金の採掘拡大のため、満洲事変後に設立されたのが「ダリストロイ」という組織であり、もちろん囚人労働が活用されることになる。

極東や東シベリア地方では産業基盤が整っていないため、様々な食品産業、製粉所、食料保管のための倉庫建設も進める必要があった。本稿では具体的な食料として塩や野菜・ジャガイモを例として取り上げた。金に糸目をつけず塩を確保せよとのスターリンの督促について、以前の拙稿で言及したことがあったが、この塩についても満洲事変以前から穀物同様、遠いウクライナから極東へと輸送されていた実態を確認できた。野菜や本稿では触れなかった肉類に関しては、鮮度という観点から穀物以上に当局の配慮が求められていたことが諸決定から理解できた。

各地域の党指導者に対して、スターリン指導部が現地における食料の調達や他の地方への搬出について厳しいノルマの遂行を求めていたが、地方組織間には軋轢も生じ、それを中央が調整する必要に迫られていたことも明らかになった。食料を自給できず、食料生産に余裕がある地域からの輸送に依存している地域は極東以外にも存在していたが、その中でも二都たるモスクワ、レニングラード、それにエネルギー基地たるドンバスと並んで、本稿が問題とした時代には極東が特に重視されていたことは明らかであろう。外国でありながら、スターリン当局が重視していたのがモンゴルで、ソ連国内を犠牲に優先的に食料問題で配慮されていたことについては、すでに発表した著書に言及した通りである［寺山 2017：159］。そして最後に 1933 年 8 月 13 日の政治局決定で、特別国防フォンドが創設されるにいたる。6000 万プードという備蓄量は収穫期直前の 1932 年、1933 年夏にソ連全土に残存していた穀物量にほぼ相当し、極東地方、東シベリア地方で備蓄を目指していた量の規模の大きさを理解することができるだろう。しかもそれだけの量の穀物を保管する倉庫をわずか 8 か月で完成させるとの計画である。この決定で建設が決まった倉庫、製粉所の建設過程については、機会があれば改めて別稿で論じたい。

注

（1）満洲事変から約 2 か月後の 1931 年 11 月 24 日、西シベリアと極東の党指導者に対し、スターリン、モロトフが相次いで命令を発した。西シベリア地方党委のエイヘ、グリャディンスキーには、「連邦の革命軍事会議により本年 12 月 1 日、編成計画に基づきオムスクへ重飛行中隊が移駐される。飛行中隊の人員は 400 人である。あなたの個人的な責任のもと、赤軍兵士 200 人のための兵舎、200 人の指揮官のためのアパートを至急確保されたし。同時にレヴァンドフスキー、連邦の革命軍事会議の指示に基づき、この飛行中隊のための格納庫建設をオムスクで至急着手されたし。エイヘまたはグリャディンスキーはこれらの方策の遂行を可能にすべくオムスクに出張すること。講じられた方策を連絡されたし」（РГАСПИ, 558/11/42/73.）と打電された。一方で極東地方党委のアンドレーエフ、ブツェンコには、「連邦の革命軍事会議の編成計画に基づき、1 月 1 日にハバロフスクへ水上飛行機 12 機からなる飛行中隊が移駐される。あなたの個人的な責任において、200 人の赤軍兵士の兵舎と 150 人の指揮官のアパートを確保されたし。同時にブリュッヘルの指示にしたがって、この飛行中隊のための格納庫の建設にも早急に着手し、遅くとも 2 月 1 日までには完成されたし。講じられた方策を連絡されたし」（РГАСПИ, 558/11/42/75.）と打電された。レヴァンドフスキーはシベリア軍管区司令官、ブリュッヘルは極東軍司令官である。飛行機部隊の派遣と同時に兵舎、格納庫の建設を命じており、いかに緊急的な対応だったのか理解できよう。エイヘ（Эйхе, Роберт Индрикович 1890-1940）は西シベリア地方党委第一書記（1930 年 8 月──1937 年 10 月 17 日）（www.knowbysight.info/EEE/00028.asp）、グリャディンスキー（Грядинский, Фёдор Павлович 1893-1938）は西シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長（1930 年 8 月 26 日──1937 年 8 月 15 日）（www.knowbysight.info/GGG/02262.asp）、アンドレーエフ（Андреев, Иван Андреевич 1897-1973）は極東地方党委第二書記（1930 年 4 月──1932 年 2 月）（www.knowbysight.info/AAA/06387.asp）、ブツェ

ンコ（Буценко, Афанасий Иванович 1889-1965）は極東地方ソヴィエト執行議員会議長（1931 年 9 月 9 日――1933 年 3 月 7 日）（www.knowbysight.info/BBB/01660.asp）であった。

（2）日本軍への対抗策の一つとしての潜水艦・魚雷艇製造と極東への輸送については、［寺山 2022a］を参照のこと。

（3）ソ連各地からシベリア鉄道で極東地方へ派遣される兵士・指揮官の満洲事変への反応については［寺山 2021］を参照のこと。

（4）ガマルニクの活動については、［寺山 2020、寺山 2023a］を参照のこと。

（5）コストロマ県に生まれ、1909 年に入党（ロシア社会民主労働党）、内戦以降イワノヴォ・ヴォズネセンスクで勤務、同県党委書記、同県ソヴィエト執行委員会議長を務める。ドネツクに移り、1925-28 年ウクライナ共和国国内商業人民委員、1928-30 年ソ連商業人民委員部参事会メンバー、1930 年ソユーズフレープ取締役会議長、ソ連供給人民委員代理、1932-33 年 4 月ソ連人民委員会議付属調達委員会議長代理、1933 年 4 月 -34 年 4 月ソ連人民委員会議付属農産物調達委員会議長、1934 年 2 月 -37 年 12 月党中央委員、1934 年 4 月 -37 年 10 月ソ連農業人民委員を歴任するが、1937 年 11 月 7 日逮捕、1938 年 3 月銃殺された（www.knowbysight.info/ChCC/05547.asp）。

（6）彼については、（www.knowbysight.info/RRR/05263.asp）を参照のこと。

（7）本文書は文書集［Кондрашин В.В. 2011a: No.423］にも掲載されているが日付が 11 月 11 日となっている（出典は РГАЭ）。この文書集にはウクライナから極東へ穀物を輸送するのに貨車を利用した場合 1 台あたり 1281 ルーブルかかると述べている。

（8）1914 年に入党、内戦中は軍に所属した。1921-23 年にはロシア共和国労働人民委員部参事会メンバー、1923-25 年ソ連外国貿易人民委員部参事会メンバー、1925-26 年駐英ソ連通商代表、1927-28 年エクスポルトフレープ取締役会議長、1928-30 年下流ヴォルガ地方執行委員会議長、1930-34 年ソ連供給人民委員代理、1934-1937 年党中央監査委員会メンバー、1934-37 年ソ連国内商業人民委員代理、1937 年 10 月 13 日逮捕、1938 年 2 月 10 日銃殺される（www.knowbysight.info/HHH/00723.asp）。

（9）Волков, Пётр Яковлевич（1896-1937）のことだと思われる。スモレンスクに生まれ、1917 年 4 月に入党。1921 年よりソヴィエト、経済活動に従事する。内戦後モスクワ県で活動していた。1928 年 11 月 -29 年 4 月モスクワ県ソヴィエト執行委員会付属輸出協議会議長、1930 年 -33 年ソ連供給人民委員代理、モスクワ消費組合評議会議長を勤めた。その間党中央委員会候補（1930-34 年）となった。1933-34 年ロシア共和国供給人民委員、1936-37 年ロシア共和国軽工業人民委員代理、1937 年 10 月 27 日逮捕、12 月 28 日処刑された（www.knowbysight.info/VVV/01883.asp）。

（10）グロドノ県ブレスト・リトフスク生まれ、ブンドのメンバー（1905-1909）を経て 1917 年 3 月入党、ゴメリ県ソヴィエト、サマラ県ソヴィエトに勤務、1921-23 年ロシア共和国小人民委員会議メンバー、1923 年同議長、1923 年 - ソ連人民委員会議行政財務小委議長、ソ連人民委員会議総務局長代理、1934-35 年ソ連検察長第二代理、1935-38 年ソ連検察長第一代理、1938 年 3 月逮捕、7 月銃殺された（www.knowbysight.info/LLL/13243.asp）。1931 年 1 月 12 日、政治局が彼をソ連人民委員会議総務局長代理に任命した（РГАСПИ, 17/3/810/13）。

（11）詳しい経歴は不明だが、アムトルグ議長を務めていた 1938 年に粛清された模様（Боев Иван Васильевич（1892）－ Открытый список（openlist.wiki））。

（12）ヴィテフスク生まれ、1905 年入党、1907 年逮捕される。1914 年キエフ商業大学卒、内戦中各地の前線で活動、1921-22 年交通人民委員部政治総局長、1923-24 年ソ連革命軍事会議メンバー、1925-27 年駐英ソ連全権代表部参事官、1927-34 年党中央統制委員会メンバー、1928-30 年ソ連労農監督人民委員代理、1930-37 年ソ連外国貿易人民委員を長く勤めるが、1937 年 10 月 7 日逮捕、1938 年 3 月 15 日銃殺される（www.knowbysight.info/RRR/04516.asp）。

（13）サングルスキー（Сангурский, Михаил Владимирович 1894-1938）は特別赤旗極東軍参謀長（1930 年 1 月 –1934 年 12 月）［Черушев Н.С., Черушев Ю.Н. 2012: 106-107］、メジス（Мезис, Август Иванович 1894-1938）は特別赤旗極東軍革命軍事会議メンバー、政治部長（1930 年 10 月 -1933 年 8 月）［Черушев Н.С., Черушев Ю.Н. 2012: 49-50］であった。

（14）レオーノフ（Леонов, Фёдор Григорьевич 1892-1938）は東シベリア地方党委書記（1931 年 2 月 9 日 –1933 年 11 月 6 日）（www.knowbysight.info/LLL/05537.asp）で、ジーミン（Зимин, Николай Николаевич 1895-1938）は東シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長（1931 年 2 月 –1932 年 10 月）（www.knowbysight.info/ZZZ/02735.asp）。

（15）アクーロフについては（www.knowbysight.info/AAA/00917.asp）を参照のこと。

（16）Богомолкин, Яков Фёдорович のことではないかと思われる。彼は 1931 年 6 月 7 日、ソフホーズ建設で優れた功績があったとして、レーニン勲章を授与されたゼルノトラストの職員の一人として表彰された。この時

の肩書は、北カフカースの穀物ソフホーズ「ギガント」の所長だったので、スターリンがベルガヴィノフに打電したこの時、極東に派遣されていたものと思われる。ボゴモルキンの経歴をたどることはなかなか難しい。

（17）このほかに政治局は、「外国貿易人民委員部には諸港に存在する 1 万 5000 t のトウモロコシ、2000 t の穀粉を調達委員会の管轄下に返還させるが、それらはウクライナへの供給に回し、ウクライナには中央黒土州から 400 万プードを搬送する。それに応じて東方への穀物輸送を削減する。ウクライナからザカフカースへの穀物搬出を停止する」等を決めている。

（18）このほか、「ミコヤン、ローゼンゴリツには収容を解除された穀物の代替についての提案を政治局に提出」させ、「外貨小委にはトルグシン〔外貨や外貨に換金可能な貴金属等を持つ人々を相手にする高級商店のこと〕への穀粉の放出についての問題を検討、中央委員会に提案」するよう指示した。

（19）Киссин, А.А.（1895-1938）は、1928 年よりツェントロソユーズ取締役会議長代理、1930 年 12 月 5 日より外国貿易人民委員部参事会メンバー［Чернобаев2008: 631］。

（20）しかも記録をたどると 1913 年の 2 万 4797 t 以降、1924/25 年、1925/26 年の 2000 t が目立つ程度で、1932 年のイランからの輸入量は突出していた。1935 年の約 1 万 5000 t、1936 年の約 6000 t がそれに次ぐ規模である。［Внешняя торговля 1960: 897-903］。

（21）1932 年にソ連は中国から 1 万 7064 t（＝ 104.2 万プード、542 万ルーブル）の穀粉と挽き割りを輸入している［Внешняя торговля 1960: 931］。

（22）カナダからは 1927/28 年の 9 万 3511 t が戦前は最大で、1930 年の 6866 t の他は、数百 t レベルで、1933 年以降小麦は輸入されていない。［Внешняя торговля 1960: 1041-1043］。

（23）オーストラリアからの輸入は、1927/28 年の 650 t 以外、1920 年代に輸入はほとんどなく、1934 年に 2 万 3863 t、1938 年に 12 万 8699 t、1939 年に 6 万 124 t 輸入しているのが目立つ［Внешняя торговля 1960: 1130-1133］。

（24）ロシア国内よりもモンゴルへの穀物輸送を優先していた側面については、［寺山 2017：159］を参照のこと。

（25）ハリコフ県生まれ、1909 年入党、1914 年ロシア軍に従軍、ドイツの捕虜となり、1917 年帰国、主としてウクライナの党・ソヴィエト組織で活動する。1923-25 年全ウクライナ中央執行委員会幹部会第二書記、1925-28 年同上書記、1928 年 12 月 -29 年 9 月ハリコフ管区ソヴィエト執行委員会議長、1930-31 年シベリア地方党委ドイツ人移住者問題局全権、1931 年 9 月 -33 年 3 月極東地方執行委員会議長、1933-36 年ロシア共和国人民委員会議付属グラヴドルトランス長、1936-37 年トボリスク管区ソヴィエト執行委員会議長、1937 年ソ連重工業人民委員部勤務中に逮捕、38 年裁かれ、1955 年解放される。1965 年モスクワで死去（www.knowbysight.info/BBB/01660/asp）。

（26）Орлов, Георгий Михайлович（1903-1991）のことではないかと思われる。レニングラード木材工学アカデミーを卒業、1927-31 年ドゥブロフカ・セルローズ・製紙コンビナートに勤務、1931-33 年セルローズ製紙産業設計国立研究所（レニングラード）に勤務、1933-38 年同技師長、1938 年 3 月党員候補から除名、8 月復党、1938 年 5 月 -40 年 8 月ソ連内務人民委員部ラーゲリ総局セルローズ製紙産業局セルローズ製紙部長などを務め、戦後ソ連の木材産業相などを歴任した（www.knowbysight.info/OOO/05601/asp）。

（27）Черносвитов, Алексей Алексеевич（1900-1937）のことだと思われる。スイスに生まれ、1918 年に入党、ソ連人民委員会議総務局長代理を務めたが、1937 年 6 月 20 日逮捕され 10 月 27 日に処刑された。高位の官僚に思えるが、なぜかほとんどデータがない（Черносвитов Алексей Алексеевич（1900）－Открытый список（openlist.wiki））。

（28）これ以外に、この布告では、①供給人民委員部、交通人民委員部としかるべき組織は遅くとも 3 月 15 日までに、第 1 四半期の計画に基づき極東地方のための食料及び工業製品を 100％積み出すこと、③極東地方への工業移住についての問題は労働国防会議の 3 月 15 日会議に付すこと、を決めている。

（29）小麦粉、穀粒、ヒキワリ（穀粒を含む）、肉、魚、砂糖、葉茶、動物油、植物油、マーガリン、卵について総量が示されている。

（30）1932 年 11 月 14 日の供給人民委員代理から人民委員会議への報告による。同年 11 月 21 日のソ連人民委員会議布告 No.1725/358c は、この冷蔵施設について外国貿易人民委員部に対し、ソ連供給人民委員部の割当限度内で 1933 年第 1 四半期に 230 kW の電動機 4 基、荷揚げ能力 1.5 t のガントリー・クレーン 2 基の輸入を検討するよう提案した［ГАРФ, 5446/13a/374/1］。

（31）極東のみならず、ソ連全土に関して、1932 年 2 月 22 日に労働国防会議は「穀物飼料フォンドのための倉庫用地について」決定している。①穀物飼料と干し草の国家及び非常用フォンドの倉庫用地を確保する目的で、次の規模で 1932 年に追加的に倉庫を建設する：穀物飼料の国家フォンド 20 万 80 t、非常用フォンド 39 万

9920 t、干し草の国家フォンド9500 t、非常用フォンド22万6500 t、合計価格2150万ルーブル。②建設へのファイナンスは備蓄委員会に付与され、利用されていない資金を使う。③ソ連ゴスプランは第2四半期より、建設への建設資材の確保を検討すること［ГАРФ, 5674/9/21/94］。治安機関の公文書館史料（Архив Иркутского РУ ФСБ РФ）を閲覧したナウーモフによれば、1932年の政府決定にしたがい、東シベリア地方では2000 tの穀物倉庫56、300 tの干し草倉庫70、計126の動員倉庫の建設をオゲペウが課せられ、その建設のために技師を含む特別の部署が設置されたという［Наумов И.В.2004: 111］。

（32）これより前の6月23日、一度議題に上がったが決定を延期されていた［РГАСПИ, 17/3/889/8］。

（33）レベデフ Лебедев とも呼ばれる。1904年に入党、2回逮捕され1912年亡命（ロンドン、ニューヨーク、パリ）、1918年帰国、通信社、教育人民委員部、外務人民委員部で活動、1921-23年スウェーデン駐在代表、1925-26年駐伊ソ連全権代表、1926-27年国営出版社合同編集評議会議長、1927-28年ソ連最高国民経済会議中央統計局長代理、1928-30年党中委扇動プロパガンダ出版部長代理、1930-33年ソ連人民委員会議総務局長、1933-36年ソ連人民委員会議付属無線化・無線放送全ソ委員会議長、1936-38年ソ連人民委員会議付属芸術問題委員長、1939-40年ソヴィエト大・小百科事典編集長代理、1940年6月2日死去した（www.knowbysight.info/KKK/03126.asp）。

（34）ポーランド人、カリシュのギムナジウム卒、1908-15年ワルシャワ大学、モスクワ大学の文学部で学ぶ。1916年よりロシア軍、1918年より赤軍に加わる。1925年労農赤軍軍事アカデミー基礎学部聴講生、以後参謀部等、軍の中央機構に勤務、1928年6月ソ連ゴスプランに派遣され、1931年4月～37年5月ゴスプラン国防部長、雑誌『軍事思想』編集長代行も務める。1937年6月16日逮捕、9月14日処刑される［Черушев Н.С., Черушев Ю.Н. 2014: 461-462］。

（35）オゲペウの経済局長ミローノフは1932年5月20日、この時点でのソ連全土における缶詰工場建設における欠陥について報告し、ソユーズコンセルヴは1932年、缶詰工場の大規模建設プログラムにより22工場（果実・野菜工場19、コンデンスミルク加工2、ガラス容器1）を建設中で果実・野菜缶詰の5工場は同年7月に運行開始の予定だったが、様々な問題（建設主体の指導、責任の欠如、計画の欠陥、設備、電気、建設資材、労働力の不足、水道・灌漑設備の不備）を抱えていると指摘しており［ГАРФ, 6760/3/27/ 8-15］、問題はスパスク工場に限った話ではなかった。1932年8月10日、労働国防会議は改めて、「1932年第3四半期における缶詰産業の生産プログラムの保証について」布告を採択している［ГАРФ, 6760/3/27/1-3］。ブリキ、ガラスや瓶、樽材などの生産、ボイラー、変圧器、発電機、電気設備の提供などを問題にしていた。

（36）エカチェリノスラフ県生まれ、1902年鉄道学校卒、1909年入党、1914-16年ロシア軍、主としてウクライナで活動、1924-30年党中央統制委員会メンバー、1925-30年ソ連労農監督人民委員代理、1930年2月–37年8月ロシア共和国人民委員会議議長第一代理、1937年8月1日逮捕、10月30日処刑される（www.knowbysight.info/LLL/05510.asp）。

（37）カルーガ県生まれ、1913年入党、1917年11月ペトログラード党委、1918年以降、ペトログラード、サラトフ、北カフカース、バシキールなどのチェカーに勤務する。1921年ロシア共和国人民委員会議付属ヴェチェカー（反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会）東方部長、1921-23年燃料局長、ネフテシンディカート支配人、1923-26年ソ連最高国民経済会議北西工業ビューロー議長、1924-37年党中央委員、1926-30年ロシア共和国最高国民経済会議議長、1926-30年ソ連最高国民経済会議議長代理、1927-30年党中委組織局員候補、1930-34年党中委組織局員、1930年12月-32年1月5日ソ連供給人民委員代理、1932年1月5日-36年10月1日ソ連木材産業人民委員、1936年10月19日–37年ロシア共和国食料産業人民委員、1937年6月21日逮捕、10月30日処刑される（www.knowbysight.info/LLL/05272.asp）。

（38）エニセイ県生まれ、1904年エスエルに入党、1917年6月ロシア社会民主労働党入党、西部州、ベラルーシ、ウクライナ等で活動、1923-24年ロシア共和国食料人民委員、1924-27年サハロトレスト取締役会議長、1927-28年ソ連産業銀行取締役会議長、1927-30年党中央統制委員会メンバー、同時に1928-29年ゼルノトレスト取締役会議長、1929-30年ソ連農業人民委員代理、1930-34年ソ連国立銀行取締役会議長、同時にソ連財務人民委員代理、1934-37年ソ連穀物畜産ソフホーズ人民委員、1937年6月逮捕され、11月処刑される（www.knowbysight.info/KKK/02972.asp）。

（39）ラトヴィア人、1937年8月15日に逮捕されたときはソ連水運人民委員代理、1938年6月20日処刑される。Архив Александра Н. Яковлева - Альманах "Россия. XX век" - Биографический словарь（alexanderyakovlev.org）

（40）1932年6月23日会議［РГАСПИ, 17/3/889/9］、7月10日会議［РГАСПИ, 17/3/891/9］では決定は延期されていた。

（41）グロドノ県スロニーム郡（現ポーランド領）生まれ、赤色教授学院哲学部卒、産業協同組合等に勤め1938年6月の逮捕時にはモスゴルヴヌトルグ Мосгорвнуторг に勤務していた。（Эпштейн Меер Самуилович（1894）—

Открытый список（openlist.wiki））娘の回想による。

（42）添付された表には 17 の地方とそこでの実績について記載されている。極東地方では第二四半期の実績が 3500 t で計画の 43.7%、7 月が 1198 t で 48.2%、これらの数字は他の地域と比較すると平均的な印象を受ける。レニングラード州では 56%、ベラルーシでは 13-18%である［ГАРФ, 6759/2/181/24］。

（43）米国からは 1930 年代から 1933 年まで塩の輸入はなかった。この後も 1939 年に 1400 t を輸入しているにすぎない。

（44）サンクトペテルブルグ県生まれ、1912 年に入党、ペトログラードで当活動に従事、1927-28 年ソ連国内外商業人民委員部レニングラード州全権、1928 年 –30 年中央黒土州ソヴィエト執行委員会議長、1930 年 8 月 -37 年 8 月西シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長、1937 年 8 月 10 日逮捕、38 年 2 月 10 日処刑される（www.knowbysight.info/GGG/02262.asp）。

（45）ペンザ県生まれ、1915-18 年従軍、1918 年入党、ペンザ県で活動、1926-28 年ペンザ県ソヴィエト執行委員会議長、1928 年 8 月 –32 年 8 月中流ヴォルガ州・地方ソヴィエト執行委員会議長第一代理、1932 年 8 月 –37 年 8 月中流ヴォルガ・クイブィシェフ地方・州ソヴィエト執行委員会議長、1937 年 8 月 19 日逮捕、10 月 30 日処刑される（www.knowbysight.info/PPP/04068）。

（46）ウファ県生まれ、1911-14 年メドレセ「ラスーリヤ」で学び、1920 年入党、1921-22 年スヴェルドロフ名称共産主義大学で学ぶ。1922-25 年バシキール州ソヴィエト党建設学校学習部長、教員、1926-28 年バシキール州党統制委員会党参事会書記、1930-37 年バシキール自治ソヴィエト社会主義共和国人民委員会議議長、1937 年 10 月 4 日逮捕、38 年 7 月 11 日処刑（www.knowbysight.info/BBB/12387.asp）。

（47）1918 年入党、内戦中赤軍内で政治活動、1930-34 年党中委候補となり、1932-33 年 11 月に東シベリア地方党委第 2 書記を務めた（www.knowbysight.info/KKK/03287.asp）。

（48）1906 年逮捕、1917 年 2 月入党、極東でパルチザン部隊、19 年逮捕・釈放、イルクーツク県革命委員会議長代理、ヴェチェカー・オゲペウにも属す。1922 年までエニセイ県党委員会責任書記、25-27 年カメンスク管区党委員会責任書記、27-29 年トムスク管区党委員会責任書記、32 年 10 月 -34 年 3 月東シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長、34 年 2 月 11 日よりソ連人民委員会議附属ソヴィエト統制委員会メンバー、37 年 9 月までソ連人民委員会議附属ソヴィエト統制委員会クイブィシェフ州全権、37 年 9 月 25 日逮捕、40 年 10 月 19 日自由剥奪 8 年の刑、46 年 5 月釈放、48-50 年 11 月アルテリ・メタロプロム（アバカン）、50 年 11 月逮捕、51 年 1 月ポドテソヴォへの流刑、71 年クラスノヤルスク地方シューセンスクで死去（www.knowbysight.info/BBB/01609.asp）。

（49）ほぼ同じ時期、1933 年 3 月 30 日、政治局は「東シベリア地方におけるジャガイモの成熟期間が遅れていることから、例外措置として 1933 年 2 月 20 日付人民委員会議と党中委によるジャガイモの国家供出機関に関する決定を変更し、9 月 20%、10 月 70%、11 月前半 10%と定める（従来は 9 月 30%、10 月 60%、11 月前半 10%）」［РГАСПИ, 17/3/919/19］と決定しており、極東への容赦ない搬出とは異なり、調達時期については柔軟に対応している印象をうける。

（50）プスコフ県ゴラ村生まれ、1915-17 年ロシア軍、1917 年 11 月入党、1917-18 年赤衛隊（オデッサ）、1918 年労農赤軍、内戦中オムスク狙撃師団、労農赤軍西部フロント軍事委員、25-28 年労農赤軍政治部組織人事部長、28-29 年沿ヴォルガ軍管区政治部長代理、29-31 年党中央委員会機構、31-32 年 2 月党中央委員会行政・経営・労組幹部部長代理、32 年 2 月 -33 年 7 月極東地方党委員会第二書記、33 年 7 月 -35 年 3 月中流ヴォルガ地方土地局政治部長、35 年 3-7 月党中央委員会農業部長代理、35 年 7 月 -36 年 2 月党中央委員会工業部長代理、36 年 2 月 -37 年 9 月レニングラード州ソヴィエト執行委員会議長、37 年 8 月 –38 年 1 月ソ連財務人民委員第一代理、37 年 9 月 -38 年 7 月ソ連国立銀行取締役会議長、38 年 7 月 16 日逮捕、39 年 2 月 25 日銃殺（www.knowbysight.info/GGG/02230.asp）。

（51）その内容は、① 1932 年収穫からの穀類と飼料の国家フォンドの集中地点における形成期限を、穀粒は 1932 年 12 月 1 日、穀粉は 1933 年 1 月 1 日、ヒキワリは 1933 年 1 月 1 日とする。② 1932 年収穫からの穀類と飼料の非常用フォンドの集中地点における形成期限を、穀粒は 1933 年 1 月 1 日、穀粉は 1933 年 3 月 1 日、ヒキワリは 1933 年 2 月 1 日とする。③労働国防会議付属備蓄委員会は穀類と飼料の国家フォンド、非常用フォンドの形成期限を守ること。④労働国防会議付属調達委員会とソ連供給人民委員部は、定められた期限内に国家フォンドと非常用フォンドを形成するため、穀類と飼料資源の利用計画において、しかるべき量の食料穀物と穀物飼料の割り当てを見込んでおくこと。⑤ソ連供給人民委員部は穀粉フォンドに残す穀粒の製粉、ヒキワリの加工とフォンド形成も行うこと。⑥交通人民委員部と水運人民委員部は穀類と飼料の国家フォンド、非常用フォンドを定められた期限内に集中地区へ輸送すること［РГАСПИ, 17/3/896/8,22］。この決定は 8

月19日、労働国防会議による布告No.1004/294/cとなった［ГАРФ, 5674/9/23/120-121］。

（52）詳しい氏名、経歴は不明。スターリン執務室に集中的に4日（1931年12月28日、1932年1月29日、4月14日、8月27日）訪問した記録を残すマルティノヴィチ К.Ф.Мартинович（1894-1938）のことだと思われる。この時期の肩書きは重工業人民委員部監督総監となっている［Чернобаев А.А. 2008: 659］。同室者の顔ぶれをみても、満洲事変に対しての軍事力増強の話し合いに参画していたものと推測される。

（53）ソ連人民委員会議議長代理ヴァレリアン・クイブィシェフの弟で1929年12月より労農赤軍総務局長、1930年10月より労働国防会議運営会議書記、労農監督人民委員部参事会メンバー、同海軍監督部指導者を務めていた。

（54）ジブラクは、オデッサに生まれ1919年に赤軍に加わり、内戦中はオデッサで活動、ロシア共和国食料人民委員部教官（1923-24年）のあと赤軍を経て、1926年よりソ連オゲペウ経済局に勤め始め中央アジアにも勤務、ソ連労働国防会議附属備蓄委員会責任書記となる（1931年10月 –32年5月）。同委員会メンバー、書記（1932年5月-36年）、ソ連オゲペウ経済局長補佐（1933年2月-34年7月）、ソ連人民委員会議附属特別建設局長（1935年-36年1月）、ソ連内務人民委員部特別建設局長（1936年1月-37年8月、穀物施設群建設）、1937年8月16日逮捕、10月8日処刑される［Петров Н.В., Скоркин К.В.,: 206-207］。1932年5月9日ソ連人民委員会議が彼を備蓄委員会のメンバーに任命した記録がある［ГАРФ, 5446/1/67/346.］。

（55）これに続いて8月25日にはウンシュリフトが休暇に入ったため、ニコライ・クイブィシェフが委員長となり、ゴスプランよりボトネルも加わった（ГАРФ, 5446/14a/295/1）。この労働国防会議の決定は続く8月22日に政治局でも承認された［РГАСПИ, 17/3/897/17］。

（56）この報告の中でチェルノーフは1933年7月1日段階のソ連全土の穀物残余は6380万プードで、1932年7月1日段階の6040万プードよりも340万プード多くなると述べている。

（57）「現存する穀物の正確な登録、調達委員会より提出される食用穀物のバランスの正確化を備蓄委員会に課す1932年9月3日付政治局決定にしたがって報告する。①実行された在庫確認により本年5月1日現在、調達委員会のもたらした1億6400万プード〔268万6320t〕というデータとは異なり、1億6960万プード〔276万8220t〕が存在する。②調達委員会が「道中」にあるとした1100万プードはおおよその数字を採用したものである。「道中」にある穀物の正確なデータはない。昨年は5月10日現在約700万プード〔11万4660t〕と計算されたが、今年も同様の数字だと思われる。③5月と6月、承認された計画にしたがって6580万プードではなく、6720万プードを全体的な供給に費消されるはずだった。④昨年7月1日現在の食料穀物の残余は6040万プードではなく、5610万プードだった。⑤かくして本年7月1日現在の食料穀物の残余は、調達委員会が計算した6380万プードや、昨年7月1日現在実際に残っていた5610万プードに対して、5940万プード〔97万2972t〕である」［ГАРФ, 5446/27/33/131］。

（58）8月17日にソ連人民委員会議布告No.1775-385ccとして採択された［РГАЭ, 8043/11/67/3-5.］。布告の名称には「国防」という言葉はない。

（59）モスクワ県ザハリノ村生まれ、1917年入党、1920-22年ロシア共和国教育人民委員部参事会員、1922-24年ウクライナソヴィエト共和国食料人民委員、1924年6月-25年8月ロシア共和国国内商業人民委員、1925年よりフレボプロドゥクト取締役議長、1933年までソユーズフレープ取締役会議長、1933年8月29日モスクワで死去、それまでソ連人民委員会議付属農産物調達委員会製粉・ひきわり産業総局長、同調達委員会議長代理、雑誌『ソヴィエト製粉・ひきわり』編集長（www.knowbysight.info/LLL/13286.asp）。

（60）ブルガリア生まれのブルガリア人、父は穀物取引のブルガリア人富豪、ジュネーヴでプレハーノフの労働者解放団に参加、レーニンとも知り合う。ジュネーヴ大学卒、第一次大戦に従軍、1920年ブルガリア共産党入党、1921年ベルリンのロシア通商代表部職員となり、1921-24年株式会社エクスポルトフレープ社長、1925年ロシア共産党入党、1925-29年駐仏、次いで駐独連通商代表代理、1926年ロンドンで通商株式会社アルコス取締役会議長、社長。1927年ソ連通商人民委員部に勤務、1928年モスクワに行き経済活動に従事、1930-37年全ソトラスト「フレボストロイ」支配人、1937年8月逮捕され38年1月処刑される（https://museum.memo.ru/author/146/）。

（61）本決定の送付先は以下の通り。ヴォロシーロフ、クイブィシェフ、チェルノーフ、ジブラク、ヤゴダ、ミロシュニコフ、ロバチョフ、アヴラーモフ（決定⑥のみ）、オルジョニキッゼ、ポストニコフ、アンドレーエフ（Андреев, Андрей Андреевич、1895-1971、ソ連交通人民委員）決定⑦のみ）。

（62）ジルニス（Зирнис, Ян Петрович 1894-1939）はラトヴィア生まれ、1911年に入党、1914年逮捕されナリムに流刑、1916-17年従軍する。ヴェチェカー、オゲペウに勤務、東シベリア地方オゲペウ全権代表（1930年8月-1934年7月）、ソ連内務人民委員部東シベリア地方局長（1934年7月 –1936年11月）、ソ連内務人民委員部

幹線道路総局長代理（1937 年 2-8 月）、1937 年 8 月逮捕され、1939 年 2 月処刑される（www.knowbysight.info/ZZZ/02749.asp）。

（63）1904 年入党、ロシア軍に従軍、1908 年逮捕され流刑、1910 年外国へ亡命、17 年帰国、1918-21 年教員、1921 年ロシア共和国労農監督人民委員部に勤務、1924-27 年ロシア共和国ゴストルグ取締役会議長、1927 年 11 月−1933 年 1 月駐日全権代表、1933 年 11 月までソ連人民委員会議付属ゴスプラン議長代理、1933 年 11 月 -38 年 10 月駐米全権代表、1939-41 年ソ連外務人民委員部高等外交学校教員、1941 年～ソ連閣僚会議ソヴィエト情報局勤務、1955 年死去（www.knowbysight.info/TTT/03724.asp）。日本から帰国し、アメリカ合衆国への全権代表（大使）として派遣されるまでの期間の仕事だったことがわかる。駐日全権代表としての活動については［寺山 2001］を参照のこと。

（64）ステパン・エゴーロフ（Егоров, Степан Михайлович、1901-1971）については、［Петров Н.В., Скоркин К.В.,1999: 183-184］を参照のこと。

（65）1933 年 10 月 11 日、政治局はクイブィシェフが休暇の間「東シベリアと極東地方における食料穀物と穀物飼料のフォンドの創設」に関する決定の進行を監視する役割をアンティポフ（Антипов, Николай Кириллович、1894-1938、労農監督人民委員代理）に委ねた［РГАСПИ, 17/3/932/22］。アンティポフについては（www.knowbysight.info/AAA/01038.asp）を参照。

（66）1933 年 10 月 22 日、政治局は「極東地方、西、東シベリアの製粉コンビナートへの引き込み線」について、交通人民委員部に人民委員会議の予備基金から 200 万ルーブルを支出するとの労働国防会議の布告を承認し、交通人民委員部には自己資金で残りの 200 万ルーブルを支出させると決定した［РГАСПИ, 17/3/933/12］。それ以上の具体的な内容は書かれていないが、総額で 400 万ルーブル必要だったことになる。

＊ウェブ情報は、2023 年 10 月 1 日に最終確認。

引用文献

ГАРФ：Государственный Архив Российской Федерации（ロシア連邦国家公文書館）

РГВА：Российский Государственный Военный Архив（ロシア国立軍事公文書館）

РГАСПИ：Российский Государственный Архив Социально-Политической Истории（ロシア国立社会政治史公文書館）

РГАЭ：Российский Государственный Архив Экономики（ロシア国立経済公文書館）

＊本論で引用している公文書館史料の番号は、фонд（文書群）、опись（目録）、дело（一件書類）、страницы（リスト）を、/ で区切って順に記している。最後のリストは複数になる場合があるが、その文書の裏面を指す場合は об. で示し、書類の綴じ方によっては変則的に数字が大から小へ少なくなる場合もある。

Внешняя торговля

1960　Внешняя торговля СССР за 1918-1940гг. Статистический обзор, Москва.

Кондрашин В.В.

2011a Голод в СССР. 1929-1934: В 3 т. Т.1: 1929-июль 1932: В 2 кн. Кн. 1, Москва.

2011b Голод в СССР. 1929-1934: В 3 т. Т.1: 1929-июль 1932: В 2 кн. Кн. 2, Москва.

Наумов И.В.

2004　«Органы государственной безопасности Восточно-Сибирского края (1930-1936)» 寺山恭輔編『戦間期シベリア、モンゴルの政治・社会システムの改編：1917-1941 年』（平成 13-15 年度科学研究費補助金研究成果報告書）78-127 頁。

Петров Н.В., Скоркин К.В.,

1999　Кто руководил НКВД, 1934-1941: Справочник, Москва.

Чернобаев А.А.

2008　На приеме у Сталина. Тетради (журналы) записей лиц, принятых И.В.Сталиным (1924-1953гг.). Справочник, Москва.

Черушев Н.С., Черушев Ю.Н.

2012　Расстрелянная элита РККА(командармы 1-го и 2-го рангов, комкоры, комдивы и им равные): 1937-1941. Биографический словарь, Москва.

2014 Расстрелянная элита РККА. 1937-1941: Комбриги и им равные, Москва.
寺山恭輔
1998a「満州事変とソ連における「備蓄」の構築」『東北アジア研究』2 号 173-198 頁。
1998b「ソ連極東における鉄道政策：軍事化と政治部設置（1931-34 年）」『西洋史学論集』36 号 1-18 頁。
2000a「ソ連極東における動員政策：1931-1934 年」『ロシア史研究』66 号 61-82 頁。
2000b「ソ連極東における鉄道政策（二）――バムと鉄道軍特別軍団――」『西洋史学論集』38 号 80-97 頁。
2001「駐日ソ連全権代表トロヤノフスキーと 1932 年の日ソ関係」『東北アジア研究』5 号 67-91 頁。
2005「スターリンと中東鉄道売却」江夏由樹他編『近現代中国東北地域史研究の新視角』山川出版社、154-184 頁。
2017『スターリンとモンゴル：1931-1946 年』みすず書房。
2020「満洲事変とスターリン、ガマルニク」寺山恭輔編『スターリンの極東政策：公文書資料による東北アジア史再考』古今書院、31-68 頁。
2021「満洲事変にソ連の兵士、指揮官はどのように反応したのか？」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』33 号 1-18 頁。
2022a「1930 年代初頭のソ連における潜水艦・魚雷艇建造と極東への輸送」『セーヴェル』38 号、110-142 頁。
2022b「1930 年代ソ連極東・シベリアの鉄道政策：体系的輸送計画の構築」『東北アジア研究』26 号、1-31 頁。
2022c「スターリン統治下ソ連における感染症対策：極東地方、シベリア鉄道におけるチフスとの闘い」『ロシア・ユーラシアの社会』No.1061（3-4 月号）、38-83 頁。
2023a「ガマルニクのスターリンあて電報にみるソ連極東の国防力強化策（1932 年前半）」『東北アジア研究』27 号、31-83 頁。
2023b「満洲事変を契機とするソ連極東における気象観測網の拡大」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』第 35 号、1-16 頁。
2023c「1930 年代前半のスターリン統治下ソ連極東における通信、ラジオ、プロパガンダ」『二十世紀研究』第 23･24 号、99-128 頁。